

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第21集

大的遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸所在遺跡の調査

2004

福岡県教育委員会

大的遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸所在遺跡の調査



調査区遠景 (空中写真 南を望む)



水田跡検出状況 (空中写真 上が北)

序

福岡県教育委員会では国土交通省九州地方整備局（旧 建設省九州地方建設局）の委託を受け、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。現在、浮羽町、吉井町では大部分の調査を終え、一部の区間で一般共用が開始されています。

本書は、平成13・14年度に行った浮羽郡田主丸町所在大的遺跡の発掘調査記録です。

大的遺跡では弥生時代の竪穴住居跡や土坑、古墳時代中期の竪穴住居跡と水田跡などが確認されました。浮羽地方の弥生、古墳時代の集落については、浮羽バイパス建設に伴う発掘調査の進展により徐々に様相が明らかになりつつあります。今回、生産遺跡である水田跡の調査成果を加えることができたことを、大変意義深く感じています。

本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いです。発掘調査、整理作業ならびに報告書作成にあたり、多くの方々にご協力いただきましたことを、深く感謝いたします。

平成16年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例 言

1. この報告書は、平成13（2001）年度から平成14（2002）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局（現 国土交通省九州地方整備局）の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第21集である。
2. 本書に掲載した大形遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第15地点にあたり、浮羽郡田主丸町大字田主丸字大形に所在する。
3. 本書に掲載した遺構写真は今井が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真は九州航空株式会社に委託した。
4. 本書に掲載した遺構図は今井が実測し、宮地聡一郎、坂元雄紀、岩橋純子、大塚ヒロ子、小西富美子、小西裕子、中村弘子の協力を得た。
5. 本書で使用した方位は、国土調査法第Ⅱ座標系に基づく座標北である。
6. 水田土壌のプラントオパール分析ならびに炭化材の樹種鑑定は、株式会社古環境研究所に委託した。
7. 出土遺物の整理・復元作業は岸本圭の指導のもと、九州歴史資料館で行った。
8. 出土遺物の実測は今井のほか、平田春美、柳町陽子、田中典子、久富美智子、坂田順子、堀江圭子、若松三枝子、栗林明美、中岡和子、中川真理子、橋之口雅子、西亜彰子、比嘉えりかの協力を得た。
9. 遺構、遺物の製図は今井のほか、豊福弥生、原カヨ子、江上佳子が行った。
10. 本書の執筆は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
I 調査にいたる経過	1
II 調査の組織	2
第2章 位置と環境	4
I 地理的環境	4
II 歴史的環境	6
第3章 発掘調査の記録	9
I 遺跡の概要	9
II 遺構と遺物	10
III 自然科学分析	56
1 大的遺跡における樹種同定	56
2 大的遺跡におけるプラント・オパール分析	61
第4章 おわりに	67
I 大的遺跡の変遷について	67
II 水田跡について	69

図版目次

巻頭図版1	調査区遠景 (空中写真 南を望む)
巻頭図版2	水田跡検出状況 (空中写真 上が北)
図版1	調査区全景 (空中写真 上が北 合成)
図版2 (上)	1号整穴住居跡炭化材出土状況 (南から)
(中)	1号整穴住居跡完掘状況 (南から)
(下)	2号整穴住居跡完掘状況 (西から)
図版3 (上)	2号整穴住居跡カマド (西から)
(中)	2号整穴住居跡カマド (西から)
(下)	2号整穴住居跡カマド完掘状況 (西から)
図版4 (上)	4号整穴住居跡 (西から)
(中)	5・7号整穴住居跡完掘状況 (南から)
(下)	6号整穴住居跡 (南から)
図版5 (上)	1号土坑土器出土状況 (南から)
(中)	1号土坑完掘状況 (南から)
(下)	2号土坑完掘状況 (南から)
図版6 (上)	3・4号土坑土器出土状況 (西から)

	(中)	3・4号土坑完掘状況 (西から)
	(下)	5・6号土坑完掘状況 (南から)
図版7	(上)	7号上坑 (北から)
	(中)	8号土坑 (北から)
	(下)	9号土坑 (南から)
図版8	(上)	竪穴状遺構 (南から)
	(下)	13号溝 (南から)
図版9		1・2号竪穴住居跡出土土器
図版10		2・4・5号竪穴住居跡出土土器
図版11		6・7号竪穴住居跡、1号土坑出土土器
図版12		2～4号土坑出土土器
図版13		5・6号土坑出土土器
図版14		6・7号土坑、溝、竪穴状遺構出土土器
図版15		水田跡、その他の遺構出土土器、出土土製品、出土石製品

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5
第2図	周辺地形図 (1/3,000)	8
第3図	遺構配置図 (1/300)	折込
第4図	基本土層図 (1/40)	9
第5図	1号竪穴住居跡実測図 (1/40)	折込
第6図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	11
第7図	2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	12
第8図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折込
第9図	2号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	13
第10図	2号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	15
第11図	2号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)	17
第12図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	18
第13図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	19
第14図	5・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	20
第15図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	21
第16図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	22
第17図	6号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3・1/4)	23
第18図	6号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	24
第19図	7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	25
第20図	1～6号土坑実測図 (1/30)	26

第21図	1号土坑出土土器実測図 (1/4)	27
第22図	2号土坑出土土器実測図 (1/4)	28
第23図	3・4号土坑出土土器実測図 (1/3)	30
第24図	5・6号土坑出土土器実測図 (1/4)	31
第25図	7～9号土坑実測図 (1/30)	32
第26図	7号土坑出土土器実測図 (1/4)	33
第27図	掘立柱建物実測図 (1/60)	34
第28図	1・13号溝土層実測図 (1/20)	35
第29図	1号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)	36
第30図	2～5号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)	38
第31図	13～15号溝出土土器実測図 (1/3・1/4)	41
第32図	竪穴状遺構実測図 (1/60)	43
第33図	竪穴状遺構出土土器実測図 (1/3)	44
第34図	水田跡実測図 (1/200)・断面模式図 (水平方向1/200, 垂直方向1/20)	折込
第35図	水田跡南トレンチ南壁土層図 (1/60)	47
第36図	水田跡下層実測図 (1/200)	折込
第37図	水田跡下層トレンチ土層実測図 (1/40)	49
第38図	水田跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	51
第39図	その他の遺構出土土器実測図 (1/3・1/4)	53
第40図	石製品・土製品実測図 (1/1・1/3)	54

表 目 次

第1表	浮羽バイパス調査地点一覧	3
第2表	福岡県内水田跡調査地一覧	70

第1章 はじめに

I 調査にいたる経過

一般国道210号は福岡県久米市を起点に大分県日田市を經由して大分市に至る道路で、豊後街道として古くからこの地域の幹線道路であった。浮羽バイパスは、この国道210号の交通混雑の緩和と地域産業の発展を目的として、昭和48（1973）年度に事業化され、昭和52（1977）年度から用地買収に着手している。田主丸町豊城から浮羽町山北に至る総延長約14.0km、幅員16～25mの第1級道路である。現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定的に対面2車線で共用が開始されている。

この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年2月3日付で建設省九州地方建設局（現国土交通省九州地方整備局）福岡工事事務所（現福岡国道事務所以下、福岡事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現総務部文化財保護課以下、県教委）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」との調査依頼があった。これに基づき、浮羽町所在塚堂遺跡群の発掘調査を昭和54（1979）年度から57年度までの4年にわたって実施した。その後、昭和61（1986）年4月2日付で福岡事務所から再度「埋蔵文化財の調査について」との調査依頼があり、県教委は塚堂遺跡をのぞく16地点で発掘調査が必要と回答した。この16地点について、随時協議しながら現在まで発掘調査を実施している。

本書で報告する大的遺跡2・3次調査区は、昨年度報告した大的遺跡1次調査区の東側に隣接し、15地点に当たる。大的遺跡の南側に隣接する田主丸中学校に大型車の侵入路がないことから、地元の強い要望があり建設が急がれた。これを請け、平成12（2000）年2月16日～24日に試掘調査を実施し、遺構の存在を確認。同年5月8日より大的遺跡1次調査区の本調査に着手した。途中、日誌遺跡の調査をはさみ、同年12月25日に1次調査区本調査を終了した。

1次調査区の東側隣接地（3次調査区）を平成12年12月に試掘調査したが、この時点では遺構は確認できなかった。平成13（2001）年5月に町道に面した部分（2次調査区）の試掘調査を行い、遺構を確認した。周囲の水田の水が落ちるのをまって、同年9月10日より本調査に着手し、途中1次調査区の第3遺構面の調査を並行して行った。2次調査区の西半で思いがけず水田跡を検出したため、福岡事務所と協議の結果、調査期間を延長することとした。3月8日に調査を一旦終了し、水田跡の広がりを確認するため、平成14（2002）年4月15日から調査区を拡大して調査を再開し（3次調査）、同年8月8日にすべての調査を終了した。8月30日に本遺跡の内容の記者発表を行った。



空中写真撮影風景

II 調査の組織

発掘調査および報告書作成の関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

(現 国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所)

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]	[平成15年度]
所長	森 将彦	森 昌文	森 昌文	増田 博行
副所長	兼武征二郎 田中 義高	有働 伸幸 田中 義高	小串 正志 百田 国広	小串 正志 徳留 忠
建設専門官			池田 正	
建設監督官	有家 信義	浅井 博海	浅井 博海	内田 智祝
調査第2課長	赤尾 文生	久野 隆博	久野 隆博 上村 一明	上村 一明
調査係長	大槻 謙	大槻 謙	大槻 謙 長友 浩信	長友 浩信
専門調査員			島川 浩一	島川 浩一
建設技官 (現 国土交通技官)	松山ひろみ	佐藤 博信	佐藤 博信	立石 洋和
工務課長	後藤 昌隆	末岡 彰	末岡 彰	田中 秀之進
工務第一係長	古木 英昭	山口 隆	山口 隆 竹永 浩	竹永 浩
工務第三係長	川内 学	川内 学	川内 学	山下 正昭
技術審査係長			森山 安夫	

福岡県教育庁総務部文化財保護課

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]	[平成15年度]
総括				
教育長	光安 常喜	光安 常喜	森山 良一	森山 良一
教育次長	森山 良一	森山 良一	三瓶 専夫	三瓶 専夫
総務部長	岩本 誠	三瓶 専夫	松本 通憲	清水 圭輔
文化財保護課長	柳田 康雄	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
参事			井上 裕弘	
参事兼課長補佐	平野 義峰	久芳 昭文	久芳 昭文	
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也 川述 昭人	川述 昭人
課長補佐兼管理係長	平野 義峰			木下 修
参事補佐兼管理係長			古賀 敏生	古賀 敏生
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	佐々木隆彦	小池 史哲

参事補佐兼調査第二係長	児玉 真一	児玉 真一	児玉 真一	中間 研志
庶務				
管理係長		三笠ひとみ		
事務主査	吉武 祐二			
主任主事		秦 俊二	秦 俊二	末竹 元
調査・報告				
主任技師	今井 涼子 (調査担当)	今井 涼子 (調査担当)	今井 涼子 (調査・報告担当)	今井 涼子 (報告担当)
技師	大庭 孝夫 (調査担当)		大庭 孝夫 (報告担当)	

発掘調査中には、田主丸町教育委員会の丸林禎彦氏、江島信彦氏に大変お世話になった。また、田主丸中学校の教職員、生徒の皆さん、近隣の住民の方々には、調査の経過を温かく見守っていただいた。記して感謝いたします。

第1表 浮羽バイパス調査地点一覧

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積 (㎡)	発掘調査 面積 (㎡)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮羽	9. 日永	日永	19,000	16,800	S61	H4・5	6・7集
2	吉井	7. 塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54~57・59~61	S57~59・62	1~5集
3	吉井	7. 能楽	-	5,100		H6 試験のみ	-	-
4	吉井	6.7. 三平田	堂畑	8,400		H8・9・12~14	H13~	17・20集
5	吉井	6. 新治	仁右衛門畑	8,400	3,000	H7~9	H11・12	12・14集
6	吉井	6. 稲崎A	稲崎A	6,300	1,600	S62	H9	9集
7	吉井	6. 稲崎B	稲崎B	4,900	520	S62	H9	9集
8	吉井	6. 清宗	-	2,400		H1 試験のみ	-	-
9A	吉井	5.6. 上菅A	堺町・大塚	21,000	18,000	H1・2	H5	8集
9B	吉井	5.6. 上菅B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	9・10集
10	田主丸	5. 船越A	船越高原	25,000		H8~12	H11~13	13・15・16集
11	田主丸	5. 船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6~9	H10	11集
12	田主丸	5. 榎木		19,200				
13	田主丸	5. 常盤	松門寺A	15,000		1,900	H11~	H13~18集
14	田主丸	5. 野田A		14,800				
15	田主丸	5. 野田B	大的・日籠	10,800	2,100	H12~14	H14~	19集・本書
16	田主丸	5. 野田C		13,500		H14~		
17	浮羽	7. 朝日	-	2,400		H6 試験のみ	-	-
18	浮羽			28,400				
19	浮羽			16,600				

第2章 位置と環境

I 地理的環境

本遺跡は浮羽郡田主丸町大字田主丸字大的に位置する。

田主丸町は筑後川中流域の南岸に位置する総面積5,099㎥、総人口21,532人の町である。東は浮羽郡吉井町、西は久留米市と境を接し、北は筑後川を挟んで甘木市・朝倉郡朝倉町・三井郡北野町と、南は水縄山地の山頂をもって八女郡星野村・同上陽村と隣接する。筑後川や巨瀬川、美津留川などの豊かな流れと水縄山地の伏流水に恵まれた、水と緑豊かな町で、山辺（水縄山麓）には果樹園や植木が、川辺（筑後川沿岸）には水田が広がる。

筑後川上流域は火山地域のため、川に流入する砂礫が少なく、筑後川中流域は他の河川に比べ扇状地や自然堤防の形成が少ない。本流に注ぎ込む支流が多いうえに、下流に久留米地峡部があり、古来より氾濫が多い地域である。町内の地図を広げると、川の流れが幾たびもかわったことが窺える。加えて、浸食作用により川床が削られ、水面が周囲の平野部より2～3m低く、この豊かな流れを農業用水、生活用水に利用するには大土木工事を必要とした。

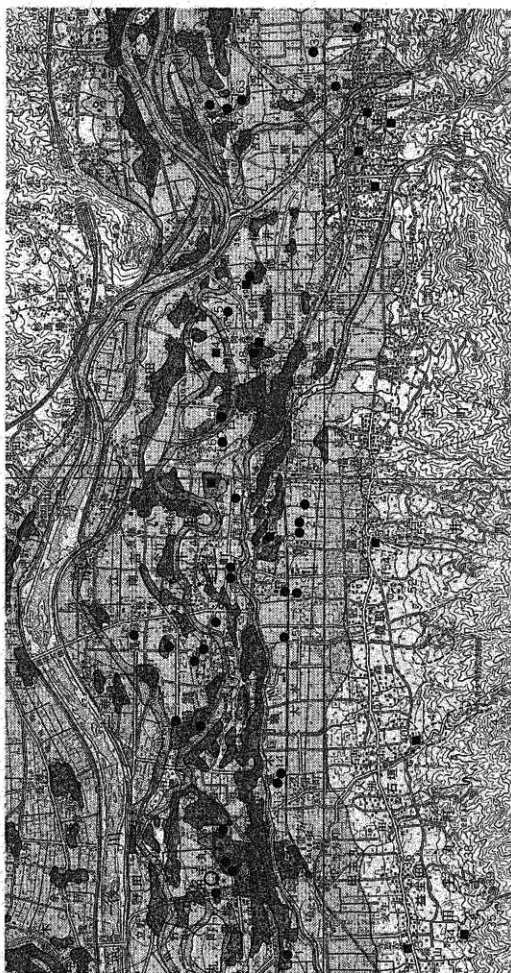
江戸時代前期、筑後川本流（中流域）に袋野堰、大石堰、山田堰、床島堰が設置され、用水が整えられる。これにより河川沿岸の新田開発が進み、現在の筑後平野の原風景が生まれる。しかし、洪水の被害は質、量ともに拡大することとなり、久留米藩にとって堰と用水の維持管理、治水事業は重要な政策であり続けた。田代家文書や丸林家文書などの江戸時代の大庄屋や庄屋であった家に伝わる古文書から、当時の利水事業の様子を窺い知ることができる。

明治18年（1885）の大洪水後、河川改修が本格化し洪水の被害は減ったが、甚大な被害をもたらした昭和28年（1953）の大水害は、いまだ流域の人々に鮮明な記憶を残している。本遺跡の周辺もこの時、水に浸かっている。

水に悩んだのは川辺に住む人々だけではなく、水縄山地は水縄断層の活動により地盤が押し上げられて形成され、北麓は典型的な断層崖で急勾配である。多くの小河川が水縄山地から流れ出て複合扇状地を形成している。山辺は清流に恵まれ、古代から水田開発が進み、現在でも条里制の名残を良くとどめている地域である。しかしながら、堆積作用で天井川になっている河川も多く、たびたび山崩（土砂崩れ）が引き起こされた。また、早魃にも遭いやすく、いかに多くの田に水を掛けるか、人々の悩みは尽きなかった。

こうした水との闘いは水・川への信仰を生んだ。先述した四厘の祭造にもない神社が創建され、用水開発の功労者や水神が祀られている。また、川祭りや水神様祭りが今でも地域の人々の手で大切に行われ、受け継がれている。河童伝説をはじめとする水にまつわる伝承が多く残されているのも、信仰の深さのあらわれであろうか。

水との共生が現在の田主丸町の風土を形作っているといえるだろう。



- | | | | | |
|-------------|-------------|-----------|-----------|----------|
| 1. 鴨塘中/丁口溝路 | 23. 萬井太平木道路 | 39. 日北道路 | 55. 羅李公路 | 67. 山莊公路 |
| 2. 田田主九中學校路 | 24. 萬井太平木道路 | 40. 千九公道路 | 56. 千平八道路 | 58. 羅李公路 |
| 3. 本分道路 | 25. 萬井太平木道路 | 41. 木口道路 | 57. 千平八道路 | 59. 羅李公路 |
| 4. 龍門寺九道路 | 26. 萬井太平木道路 | 42. 神道道路 | 58. 千平八道路 | 60. 羅李公路 |
| 5. 田田1區道路 | 27. 萬井太平木道路 | 43. 寺道道路 | 59. 千平八道路 | 61. 羅李公路 |
| 6. 大源道路 | 28. 萬井太平木道路 | 44. 寺道道路 | 60. 千平八道路 | 62. 羅李公路 |
| 7. 大源道路 | 29. 萬井太平木道路 | 45. 寺道道路 | 61. 千平八道路 | 63. 羅李公路 |
| 8. 龍門寺九道路 | 30. 萬井太平木道路 | 46. 寺道道路 | 62. 千平八道路 | 64. 羅李公路 |
| 9. 龍門寺九道路 | 31. 萬井太平木道路 | 47. 寺道道路 | 63. 千平八道路 | 65. 羅李公路 |
| 10. 龍門寺九道路 | 32. 萬井太平木道路 | 48. 寺道道路 | 64. 千平八道路 | 66. 羅李公路 |
| 11. 龍門寺九道路 | 33. 萬井太平木道路 | 49. 寺道道路 | 65. 千平八道路 | 67. 羅李公路 |
| 12. 龍門寺九道路 | 34. 萬井太平木道路 | 50. 寺道道路 | 66. 千平八道路 | 68. 羅李公路 |
| 13. 龍門寺九道路 | 35. 萬井太平木道路 | 51. 寺道道路 | 67. 千平八道路 | |
| 14. 龍門寺九道路 | 36. 萬井太平木道路 | 52. 寺道道路 | 68. 千平八道路 | |
| 15. 龍門寺九道路 | 37. 萬井太平木道路 | 53. 寺道道路 | | |
| 16. 龍門寺九道路 | 38. 萬井太平木道路 | 54. 寺道道路 | | |
| 17. 龍門寺九道路 | 39. 萬井太平木道路 | 55. 寺道道路 | | |
| 18. 龍門寺九道路 | 40. 萬井太平木道路 | 56. 寺道道路 | | |
| 19. 龍門寺九道路 | 41. 萬井太平木道路 | 57. 寺道道路 | | |
| 20. 龍門寺九道路 | 42. 萬井太平木道路 | 58. 寺道道路 | | |
| 21. 龍門寺九道路 | 43. 萬井太平木道路 | 59. 寺道道路 | | |
| 22. 龍門寺九道路 | 44. 萬井太平木道路 | 60. 寺道道路 | | |
| 23. 龍門寺九道路 | 45. 萬井太平木道路 | 61. 寺道道路 | | |
| 24. 龍門寺九道路 | 46. 萬井太平木道路 | 62. 寺道道路 | | |
| 25. 龍門寺九道路 | 47. 萬井太平木道路 | 63. 寺道道路 | | |
| 26. 龍門寺九道路 | 48. 萬井太平木道路 | 64. 寺道道路 | | |
| 27. 龍門寺九道路 | 49. 萬井太平木道路 | 65. 寺道道路 | | |
| 28. 龍門寺九道路 | 50. 萬井太平木道路 | 66. 寺道道路 | | |
| 29. 龍門寺九道路 | 51. 萬井太平木道路 | 67. 寺道道路 | | |
| 30. 龍門寺九道路 | 52. 萬井太平木道路 | 68. 寺道道路 | | |
| 31. 龍門寺九道路 | 53. 萬井太平木道路 | | | |
| 32. 龍門寺九道路 | 54. 萬井太平木道路 | | | |
| 33. 龍門寺九道路 | 55. 萬井太平木道路 | | | |
| 34. 龍門寺九道路 | 56. 萬井太平木道路 | | | |
| 35. 龍門寺九道路 | 57. 萬井太平木道路 | | | |
| 36. 龍門寺九道路 | 58. 萬井太平木道路 | | | |
| 37. 龍門寺九道路 | 59. 萬井太平木道路 | | | |
| 38. 龍門寺九道路 | 60. 萬井太平木道路 | | | |
| 39. 龍門寺九道路 | 61. 萬井太平木道路 | | | |
| 40. 龍門寺九道路 | 62. 萬井太平木道路 | | | |
| 41. 龍門寺九道路 | 63. 萬井太平木道路 | | | |
| 42. 龍門寺九道路 | 64. 萬井太平木道路 | | | |
| 43. 龍門寺九道路 | 65. 萬井太平木道路 | | | |
| 44. 龍門寺九道路 | 66. 萬井太平木道路 | | | |
| 45. 龍門寺九道路 | 67. 萬井太平木道路 | | | |
| 46. 龍門寺九道路 | 68. 萬井太平木道路 | | | |

第1圖 周邊道路分布圖 (1/50,000)

II 歴史的環境

近年、浮羽バイパス建設に伴う発掘調査は毎年行われ、調査報告書も随時刊行されている。その中で浮羽郡一帯の歴史的環境については繰り返し述べられているが、ここでは木遺跡との関連から、弥生から古墳時代の集落遺跡について概観したい。

弥生時代早期の状況は資料が少なく未だ見えてこない。船越高原A遺跡（II区）で刻目突帯文土器がまとまって出土しているが包含層からの出土で、近隣に集落の存在が予測されるにとどまる。また、塚堂遺跡で夜臼期の竪穴住居跡が1軒確認されたが割半著しく、詳細は不明である。

遺構が明確に確認できるのは、前期後半からである。浮羽郡内で最も早い時期の集落遺跡の一つに大的遺跡（1次調査区）があげられ、竪穴住居跡10軒、土坑、溝が検出されている。不安定な砂質土上にも集落が営まれたことが確認された。大的遺跡の南側、一段高い自然堤防上に立地する水分遺跡では、この時期から継続的に中世まで集落が営まれる。大的遺跡の浅い谷を挟んだ西側に位置する日誌遺跡では、調査区南西隅の自然堤防先端に同時期の溝と土坑が確認された。調査区の南西に遺構の展開が予測される。これに続く前期後半から中期初頭にかけての集落が大碓遺跡である。竪穴住居跡14軒、土坑50基、甕棺5基等が調査された。船越高原A遺跡（II区）、生葉地区遺跡、豊城中ツプロ遺跡でも同時期の遺構が確認されている。

中期になると調査事例が増加する。自然堤防上に立地する遺跡が多い。中期初頭から前半にかけて営まれた集落に仁右衛門畑遺跡がある。美津留川をはさんで向き合う位置には堂畑遺跡があり、仁右衛門畑遺跡との比高差約2mの低湿地中の微高地に立地する。中期後半から末にかけての集落である。同時期に船越高原A遺跡（I区）では住居跡43軒が営まれる。湿地にも数軒の住居跡がみられるが、集落の中心は自然堤防上である。近隣の船越二ノ上遺跡、船越宮の前遺跡、船越一ノ上遺跡でも同時期の遺構が検出されている。船越高原A遺跡の対岸に位置する鷹取五反田遺跡ではほぼ同時期に集落が出現し、後期前半まで存続する。調査区東隅で列状埋葬された甕棺が検出されている。千代久遺跡、西郷天神面遺跡でも中期前半の竪穴住居跡が調査されている。

後期前半の資料は今のところ見当たらない。集落立地の変化によるものであろう。少ないながら調査事例が見られるのは後期中葉まで下がる。この時期の集落は日永遺跡があげられる。竪穴住居跡19軒、土坑等が確認されたが、広型銅矛1本、広型銅戈1本を納めた埴輪遺構が注目される。後期中葉から後半に再び仁右衛門畑遺跡で集落が営まれるが、中心は調査区外にあるとおもわれる。松門寺A遺跡で後期中葉の廃棄土坑が1基確認され、集落が調査区西側の自然堤防上に展開することが予測される。ほかに塚堂遺跡、川島北遺跡でも同時期の遺構が調査されている。この後、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては調査事例が少なく、古墳時代初頭から前期にかけて集落が展開する日永遺跡があげられるにとどまる。日永遺跡は一時断絶し、後期に再び集落が展開する。

古墳時代前期から中期の集落に塚堂遺跡があげられる。塚堂遺跡ではカマド普及期の竪穴住居跡が調査され、浮羽郡域で最も早い時期にカマドを採用した遺跡のひとつとして注目される。仁右衛門畑遺跡では前期に集落が出現、中期に拡充する。一旦途絶えた後、後期後半に再び出現する。塚堂遺跡より僅かに遅れてカマドが採用されたようである。ほかに船越二ノ上遺跡、吉井大手木遺跡、吉井殺蘇遺跡、富永横枕遺跡、富永正地遺跡、長柄高崎遺跡で、少数だが前期の遺構が確認されている。

中期に営まれた集落には大的遺跡（1次調査区）があり、カマド出現期の竪穴住居跡5軒、土坑

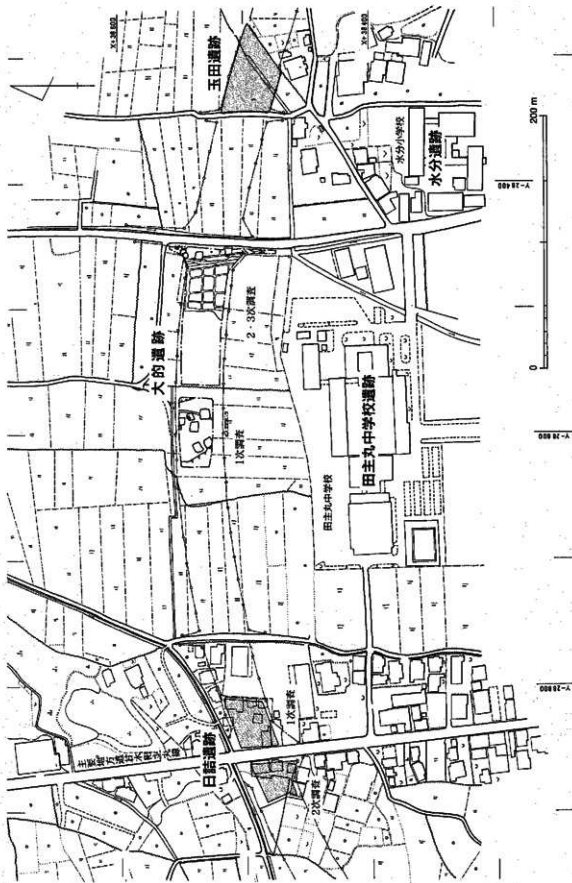
等が調査されている。堂畑遺跡は前期から継続的に集落が営まれるが、主体は後期である。中期の集落については、塚堂遺跡、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡、大の遺跡などカマド普及期の調査事例が徐々に蓄積されつつあり、これら集落相互のカマドの形態や廃棄状況、住居形態、規模などを比較検討することで、各集落の特徴がつかめるものと思われる。

船越高原A遺跡（I区）、鷹取五反田遺跡は中期に集落が営まれはじめ、後期に規模が拡大する。生業地区遺跡では古墳時代を通じて堅穴住居跡が確認されている。このほかにも大口遺跡、船越宮ノ前遺跡、豊城中ツプロ遺跡、日誌遺跡、西郷天神面遺跡では後期の堅穴住居跡が検出されており、後期の集落は調査事例が多い。集落は自然堤防上に主体をおきつつ、低湿地への広がりをみせる。

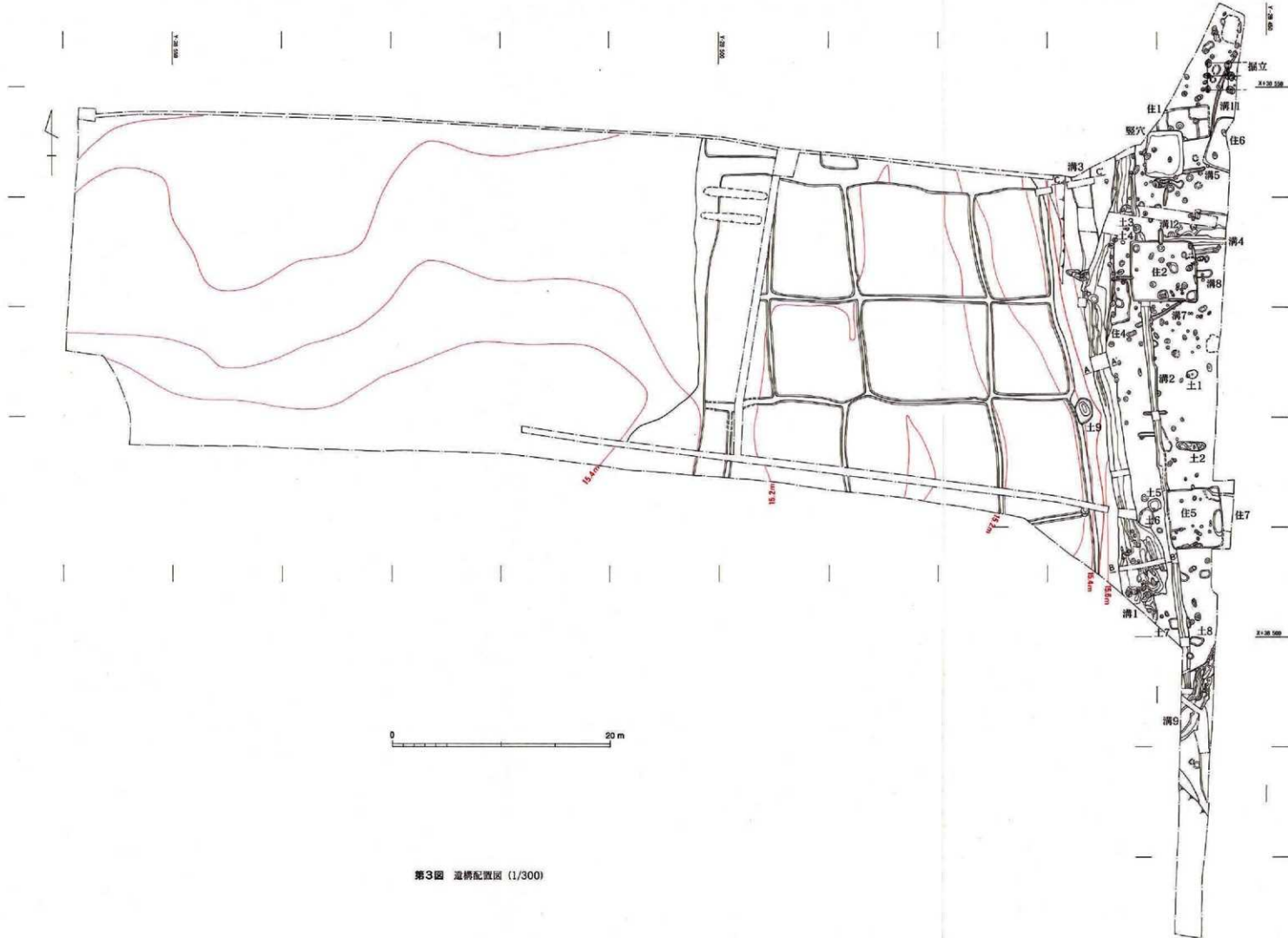
この後、7世紀前半から後半にかけて一時的に資料が認められなくなる。中央政府ではちょうど政変が起きた頃であり、なんらかの政治的影響を受けたことを反映しているのであろうか。集落が再び認められるのは、7世紀末から8世紀初頭になるまでまたなければならない。

参考文献（浮羽バイパス関係の報告書を除く）

『田主丸町誌』 第一巻～第三巻	田主丸町誌編集委員会	1996
『田主丸古墳群』	田主丸町文化財調査報告書 第2集	田主丸町教育委員会 1985
『千代久遺跡Ⅰ』	田主丸町文化財調査報告書 第3集	田主丸町教育委員会 1993
『千代久遺跡Ⅱ』	田主丸町文化財調査報告書 第4集	田主丸町教育委員会 1994
『殖木地区道跡群A地点・B地点 鷹取一条道跡』	田主丸町文化財調査報告書 第5集	田主丸町教育委員会 1996
『船越ノ上遺跡』	田主丸町文化財調査報告書 第8集	田主丸町教育委員会 1996
『船越宮ノ前遺跡Ⅰ』	田主丸町文化財調査報告書 第9集	田主丸町教育委員会 1997
『豊城中ツプロ遺跡』	田主丸町文化財調査報告書 第10集	田主丸町教育委員会 1998
『船越宮ノ前遺跡Ⅱ』	田主丸町文化財調査報告書 第11集	田主丸町教育委員会 1999
『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』	田主丸町文化財調査報告書 第12集	田主丸町教育委員会 1999
『西郷天神面遺跡』	田主丸町文化財調査報告書第14集	田主丸町教育委員会 2000
『生業地区遺跡Ⅰ』	吉井町文化財調査報告書第5集	吉井町教育委員会 1990
『長瀬高崎遺跡』	吉井町文化財調査報告書第8集	吉井町教育委員会 1996
『富永正地遺跡』	吉井町文化財調査報告書第9集	吉井町教育委員会 1997
『古井大手木遺跡・吉井観音遺跡・富永横枕遺跡』	吉井町文化財調査報告書第10集	吉井町教育委員会 1998
『生業地区遺跡Ⅱ』	吉井町文化財調査報告書第11集	吉井町教育委員会 1999
『生業地区遺跡Ⅲ』	吉井町文化財調査報告書第12集	吉井町教育委員会 2000
『大口遺跡』	浮羽町文化財調査報告書第4集	浮羽町教育委員会 1989
『田島北遺跡』	浮羽町文化財調査報告書第6集	浮羽町教育委員会 1991
『田島南遺跡』	浮羽町文化財調査報告書第13集	浮羽町教育委員会 1998
『沖出遺跡Ⅰ』	浮羽町文化財調査報告書第3集	浮羽町教育委員会 1987
『沖出南遺跡』	浮羽町文化財調査報告書第14集	浮羽町教育委員会 1999



第 2 图 展边地形图 (1/3,000)



第3圖 遺構配置圖 (1/300)

第3章 発掘調査の記録

I 遺跡の概要

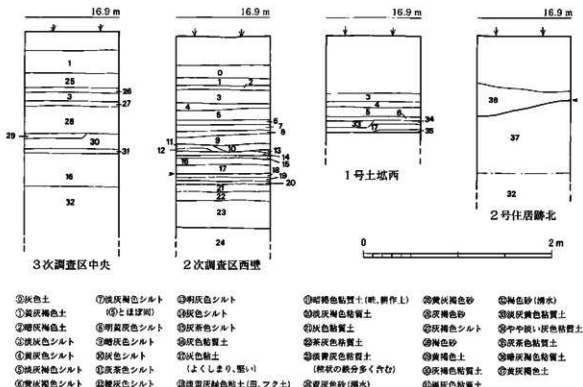
本遺跡は田主丸町大字田主丸59-1~3、60、61-2、64-1・4に所在する。

本遺跡周辺は、筑後川と耳納山地から北流する小河川が形成した自然堤防、扇状地、後背湿地が複雑に入り組んでいる地域である。本遺跡は微高地と、隣接する浅い谷状の湿地上に位置する。谷状の湿地はほぼ北西-東南方向にのびるが、調査区南端付近で東側に深く入る。大的遺跡1次調査区と田主丸町教育委員会が実施した試掘調査の結果からも、地形の複雑さがかうかがわれる。本遺跡周辺はおおよそ北西-東南方向に、微高地と谷状湿地が手指状にのびていると思われる。

試掘調査の段階では微高地(2次調査区)に遺構を確認し、大的遺跡1次調査区との間(3次調査区)は浅い谷状地形で遺構は存在しないと判断した。

2次調査区の東側から調査を開始し、重機で谷状地形を徐々に掘削し始めたところ、須恵器坏蓋(第38図1)が出土した。流れ込みと判断はしたもの、より慎重に掘削を進めたところ、見慣れない淡黄灰緑色粘質土の面が広がり、南北に走る溝状の暗褐色粘質土を確認した。溝にしては地盤、埋土ともに土質が不自然であったので、この粘質土の面を検出し、状況の把握に努めた。暗褐色粘質土が東西南北に数条走ることを確認し、水田跡であると判断した。

試掘調査段階で遺構なしと判断した範囲に水田跡が広がることが予測されたため、福岡事務所と協議の結果、調査期間を延長し調査区を西側に拡大した。しかしながら、水田跡は西側にはわずかに広がらず、1次調査区の微高地との間は空閑地であることがわかった。調査区を拡張する際に、



第4図 基本土層図 (1/40)

既に検出している水田跡の上面を追いながら表土の除去を行ったため、谷状の地形をうまく検出できていない。水田跡の西は、1次調査区の東壁付近で検出した落ち際に向かって緩く傾斜しているのが、本来の地形であったらう。

標高は、住居跡等が存在する微高地上で約16m、水田跡上で約15.2mである。大的遺跡1次調査区古墳時代遺構面は約16mである。現地表とは大きいところで1.6mの比高差があり、周囲から水が集まりやすかったことに加え、地下水位が高かったために、遺構の掘削には湧水が伴った。このため、一部遺構の深さが不正確になったことは否めない。

検出した遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑9基、掘立柱建物1棟、溝16条、竪穴状遺構1基、水田跡、ピットである。時期は弥生時代中期、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代中期、古墳時代後期である。遺構埋土は主として、弥生時代中期が灰褐色砂質土、弥生時代終末～古墳時代初頭が灰褐色粘質土、古墳時代中期が暗褐色粘質土である。また、筑紫大地震（678年）の痕跡と思われる地割れ、填砂が確認された。

遺物は弥生土器、土師器が大部分で、ほかに少量の須恵器、石製品、土製品が出土した。

II 遺構と遺物

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版2、第5図）

調査区北東部、掘立柱建物跡の南、6号住居跡の西に位置する。竪穴状遺構より古く、11号溝より新しい。平面形は長方形で、南壁4.5m、東壁2.8m、深さ0.6mを測る。主軸は16°西にふれる。

多量の炭化材が出土し、灰や焼土塊が床面直上に堆積していた。北壁上部と東側ベッド状遺構の一部が焼けて赤変しており、この住居跡が焼失したのは間違いない。垂木と思われる材や屋根に葺かれていたであろうイネ藁様の材がみられ、大部分の炭化材は焼け落ちた時の位置を保っていると思われる。イネ藁様の材については、東側ベッド状遺構の上面から側面にかけて残っていることから、ベッド状遺構や床に敷かれていた可能性もある。

炭化材については樹種の同定を行い、自然科学分析の項で詳細を報告している。

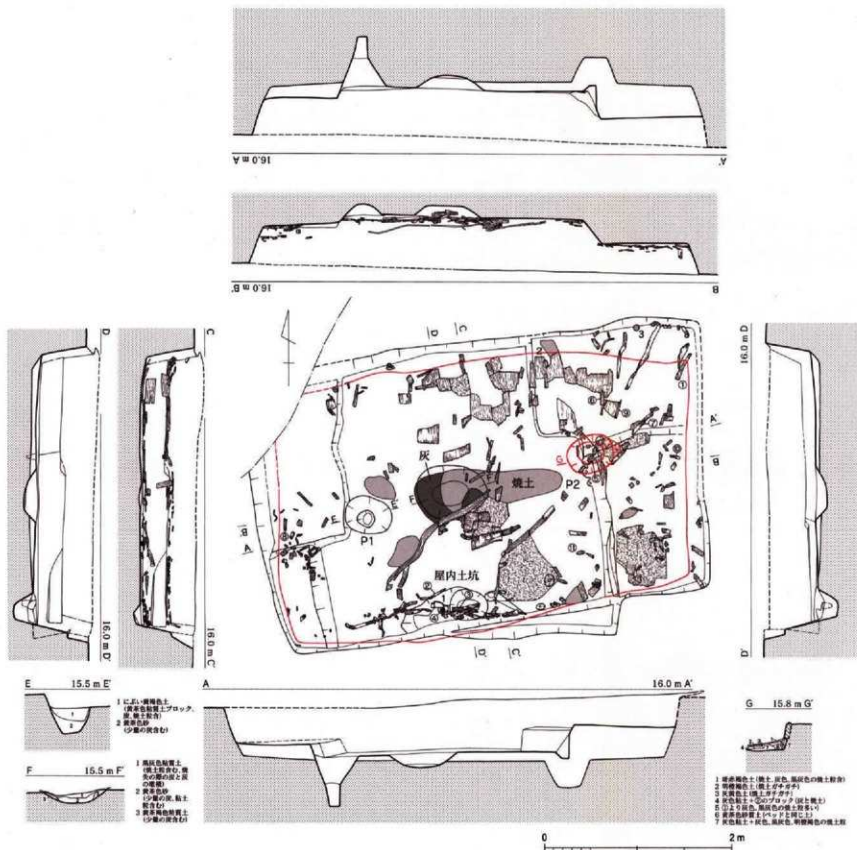
主柱はP1、P2の2本で、柱間距離は2.45mである。東側の柱は一部が炭化したため、原位置に残存していた。柱間に炉跡があり、長軸0.7m、短軸0.56mを測る。東西壁に沿って鉤型にベッド状遺構を付設し、高さは東壁側で約0.3m、西壁側で約0.1mである。ベッド状遺構を構成する土は地山に類似する黄褐色粘質土である。

南壁中央付近に屋内土坑を検出した。壁際1.2m、幅0.3mの範囲の浅い掘り込みのほぼ中央に、径約0.4mのピットが掘られている。さらに、このピットを挟むように径0.1m程の小ピットがある。西側の小ピット上に炭化材が立った状態で、中央のピット上には壁と平行方向に炭化材が折り重なった状態で出土しており、昇降施設が設置されていたものとおもわれる。壁小溝は不明。

埋土は上層から灰褐色粘質土（土器含まない）、暗灰色粘質土（土器少量含む）、黄褐色粘質土と暗灰色粘質土の混じった層である。さらに下層、つまり床面直上に炭、灰と焼土が堆積していた。焼失後放置され自然に埋没したのではなく、埋められたようである。

出土土器（図版9、第6図）

弥生土器（1・2） 1は広口の直口壺片。床面近くから出土したが、火を受けた痕跡はない。口



1 におい漬焼土
 2 赤色粘質土ブロック
 3 灰 (灰土)
 4 赤土層
 5 層内土坑

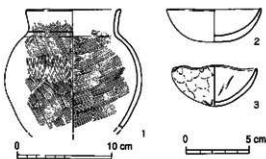
1 黒褐色粘質土
 2 赤土層
 3 灰土層
 4 赤土層
 5 層内土坑
 6 赤褐色粘質土
 7 赤褐色粘質土

1 赤褐色粘土 (粘土、灰土、黒褐色の焼土層)
 2 赤褐色粘土 (粘土、灰土)
 3 赤褐色粘土 (粘土、灰土)
 4 赤褐色粘土 (粘土、灰土)
 5 赤褐色粘土 (粘土、灰土)
 6 赤褐色粘土 (粘土、灰土)
 7 赤褐色粘土 (粘土、灰土)

第5図 1号竪穴住居跡平面図 (1/40)

縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともハケメ調整。復元口径10.0cm。

2は坏で、東側ベッド状遺構上から出土したが、やはり火を受けてはいない。体部外面は摩滅著しく調整不明。底部外面にはぶい椀が残るため、手持ちへら削りしたと思われる。体部内面はミガキ調整だが摩滅して凶化できない。底部内面は摩滅して調整不明。復元口径10.0cm、器高3.5cm。土師器(3) 完形のミニチュア土器。北壁付近上層で転がり込んだような状態で出土した。底部外面と体部内面の一部に工具痕が残る。口径6.6cm、器高3.2cm。



第6図 1号竪穴住居跡出土土器実測図
(1は1/4、他は1/3)

2号竪穴住居跡 (図版2、第8図)

調査区東部北寄り、1号溝の東に位置する。4号土坑、2・4号溝より新しい。平面形は正方形で、東壁北寄りにカマドと煙道を備えている。北壁および南壁5.7m、東壁および西壁5.5m、深さ0.5mを測る。床面近くまで掘削が進むと湧水が始まり、住居跡西半は正確に床面を検出することができなかった。このため、屋内施設と床下施設が同時に検出される形になった。カマド前面付近と西壁際が本来の床面である。主軸は座標軸の東西方向と一致する。

主柱穴はP1～P4である。P1、P2は埋土の識別が難しく、検出が非常に困難であった。P3、P4は床面上で柱痕跡を確認したが、湧水のため床が泥状になり実測に至らなかった。どの柱穴の深さも、埋土の識別の困難さと湧水の影響でやや正確さに欠ける。柱間距離は、P1～P2間2.9m、P1～P3間3.0m、P2～P4間3.0m、P3～P4間2.6mである。

中央土坑と2基の屋内土坑を検出した。中央土坑は不整形円形で、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.18mを測る。直上から河原石が出土しており、意図的に置いたものと思われる。河原石に加工は認められない。埋土は上層が暗褐色粘質土、黄褐色土、灰褐色粘質土が混じったもので焼土粒と炭化物を含む。下層は黄褐色粘質土で、焼土粒、炭化物、土器片を含む。

屋内土坑は南壁中央付近と南東隅で検出した。屋内土坑1は隅丸方形で、長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は上層が灰黄褐色土、下層が暗褐色粘質土のブロックを含む黄褐色粘質土である。屋内土坑2は長軸0.8m、短軸0.65m、深さ0.2mを測る。土坑内に径0.15mほどの小ピットがある。壁小溝は東壁に沿って1.3mほど検出した。深さは約4cmである。

P1とP3のちょうど中間辺りの床が径0.2mほど硬く焼けしまり、周囲0.1～0.2mの範囲に焼土と灰の散乱が見られた。カマドの火床(旧カマド)とみて間違いないであろう。旧カマド火床中心から北壁までの距離は1.6mあり、あまりにも壁から離れている。残存しているカマドの火床中心から東壁までの距離が0.75mであることから、いかに壁から離れた位置であるかがわかるだろう。このことから、住居は北に拡張され、その際にカマドを東壁に作り直したと推測する。

12号溝とした小溝が旧カマドの煙道のように見える。12号溝の埋土は暗茶褐色粘質土で本住居跡の埋土の一部と類似したが、本住居跡掘削途中で溝の平面形を確認できたため、別の遺構として記録している。また、旧カマド火床中央から0.75m付近に住居北壁があったと想定すると、住居

跡北壁から12号溝北端までの距離は約2mになり、煙道としては長すぎる。本住居跡との関連の可能性は捨てきれないが、やはり別の遺構としておきたい。

埋土は上層から灰色粘質土、暗茶褐色粘質土、茶褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰褐色粘質土である。最上層の灰色粘質土は埋没の最終期に堆積したもので土器を殆ど含まないが、以下の層からは多くの土器が出土した。6軒の住居跡中最も土器の出土量が多かったが、床面直上あるいは床面近くから出土したものは少ない。

さて、先に少し触れたが、本住居跡は北側に1m程度拡張されている。検出当初は、南壁に鉤型になる部分があったため2軒の竪穴住居跡が切り合っていると考え、東から2号、3号として調査を進めた。2号住居跡が3号住居跡よりも新しく、旧カマドの火床は3号住居跡のもので、東壁に付設されていたと考えていた。しかしながら、南壁の北半分は壁が崩落したのか地山に似た土が堆積し、そのため検出時に鉤型に見えていたこと、屋内施設の一部が2号住居跡と3号住居跡にまたがる状態となったこと、

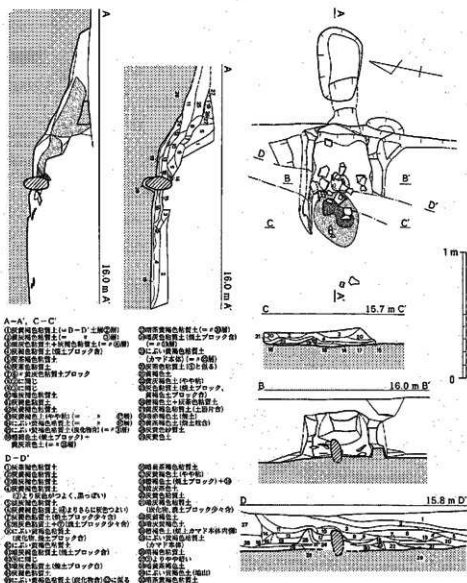
P1~P4以外に主柱穴と考えられるビットを検出できなかったことから、1軒の住居跡であると判断し、3号は欠番とした。

カマド

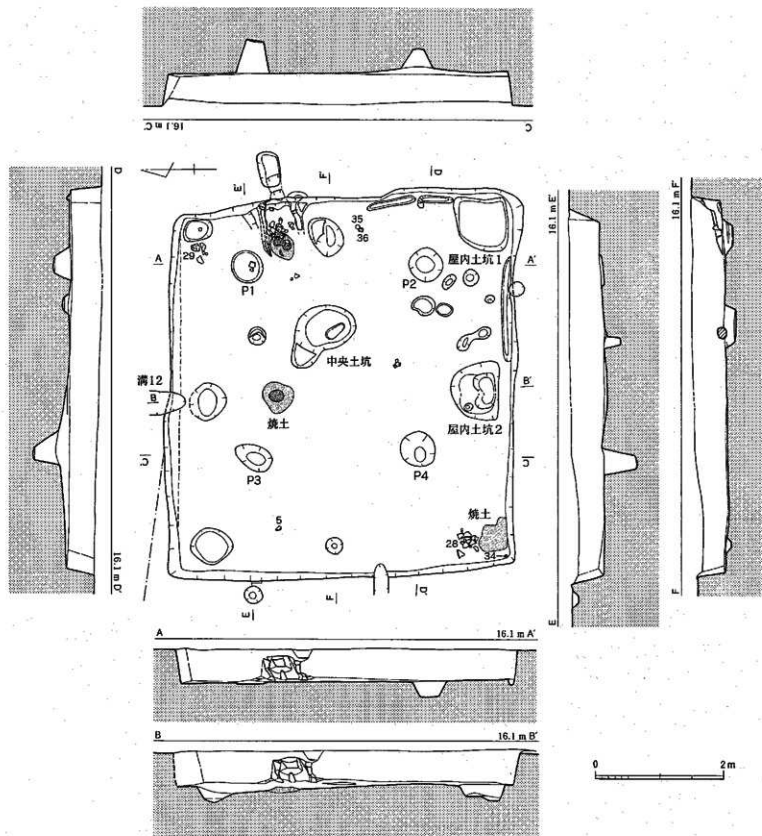
(図版3、第7図)

東壁北寄りに位置する。カマド中央付近を近代の湿抜き溝に破壊され、壁体の一部を失っているが、廃棄時の状態を比較的よく残している。

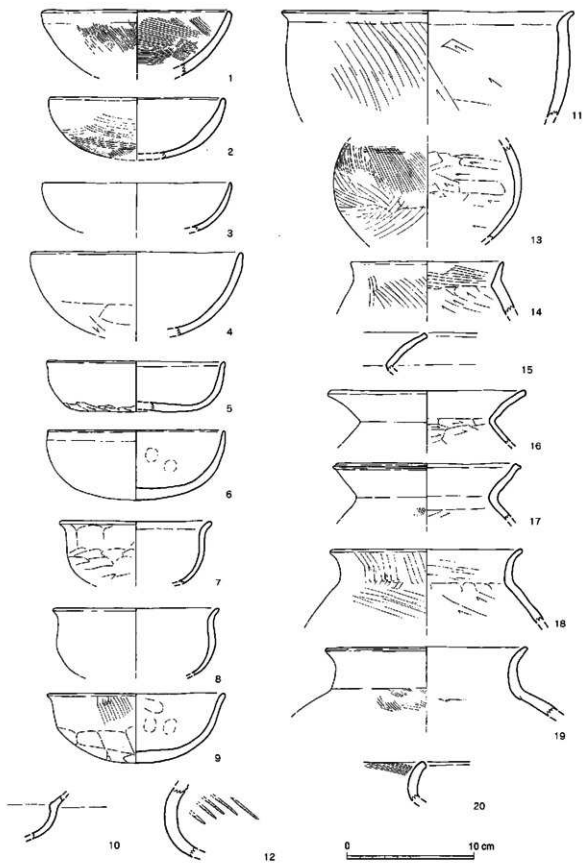
住居跡の壁を掘り込むことなく黄褐色粘質土を貼付し、カマド壁体を構築している。右袖は焚き口付近が湿抜き溝に破壊され規模がわからないが、左袖は残存



第7図 2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第8圖 2号整穴住居跡突測圖 (1/60)



第9图 2号竖穴住居跡出土上器実測图① (1/3)

し、長さ0.8mを測る。カマド内部の幅は支脚付近で0.45mである。焚き口を河原石で補強した痕跡はない。支脚には先端を打ち欠いて平たく加工した河原石を用いている。支脚前面の径0.2mほどの範囲が硬く焼け締まり、更に径0.4mの範囲に焼け面が広がり、火床と見られる。また、両袖の上部、煙道の両壁と天井部が広範囲にわたって赤変し、灰の堆積がカマド内から焚き口前面まで広く見られる。東壁から火床中央までの距離は0.75m、支脚中心までの距離は0.5m、支脚中心から火床中央までの距離は0.25mである。

煙道はカマド床面から0.1mほどの高さから始まり、幅0.2m、高さ0.15m、長さ0.8mを測る。煙道先端部分はビットとして先に掘削してしまったので土層図を作成できていないが、煙道の天井部が崩落したと思われる堆積土は見受けられず、煙道は使用時の状態を残していると考えてよいだろう。

支脚周辺から土器片が多く出土し、全体の形状がわかる程度に復元できた（第11図31）。破片の一部が中央土坑上面からも出土しており、埋没時には既に破片が広範囲に散乱していたようである。出土土器（図版9～10、第9～11図）

土師器（1～36） 1～10は坏である。1は口縁端部を内側に引き上げるようにまとめる。内外面ハケメ調整、底部外面はナデ調整。復元口径14.0cm。

2～4は口縁端部を丸くおさめる。2は体部外面のハケメ調整が確認できるほかは磨滅して調整不明。復元口径14.0cm。3は内外面とも磨滅により調整不明。復元口径15.0cm。4は体部外面に手持ちヘラ削りするが、ほかは磨滅して調整不明。復元口径16.8cm。

5・6は口縁端部をやや薄くつくる。5は底部外面を手持ちヘラ削り、体部外面はヨコナデ。内面は磨滅して調整不明。復元口径14.0cm。器高4.0cm。住居跡北西隅付近の床面近くから出土した。6は内面に指頭痕が残るほかは、磨滅著しく調整不明。口径14.05cm、器高5.5cm。

7～9は口縁部が外反する。7・8はどちらも磨滅が著しいが、7の体部から底部にかけて手持ちヘラ削りの痕跡がわずかに残る。9の体部外面はハケメ調整、底部外面は手持ちヘラ削り。内面は磨滅して調整は不明だが、指頭痕がわずかに残る。7・8の復元口径12.0cm・13.0cm、9の口径は14.0cm、器高は5.5cm。

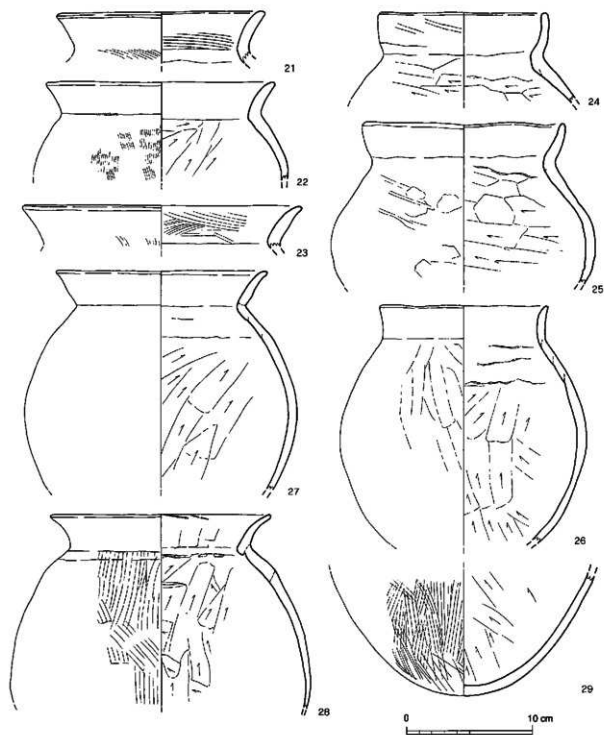
10は口縁部が屈曲し、内面に稜がつく。内外面とも磨滅著しく、調整不明。

11は口縁部を外反させる鉢。体部外面は粗いハケメ調整、内面は磨滅して不鮮明だが、ヘラ削り。復元口径23.0cm。

12は山陰系壺の頸部片。外面はヨコナデ後に、内面はナデ調整。13は小型の壺の体部。外面はハケメ調整で、上半は細かく、下半は粗い。内面はヘラ削り。

14～17は壺。14は小型の壺で、口縁部がほぼ直に立ち上がる。体部外面と口縁部内面は粗いハケメ調整、口縁端部はヨコナデ。体部内面はヘラ削りし、口縁部との境に稜がつく。復元口径12.0cm。

15～17は口縁端部を内側に引き上げるようにつくる。15は小片で磨滅著しく、調整不明。16もまた磨滅が著しいが、体部内面をヘラ削りしていることがわかる。一部、口縁部との境までヘラ削りが及んでいる。復元口径15.4cm。17は口縁部が若干内湾する。体部外面にハケメが僅かに残り、口縁部は内外面ともヨコナデ。体部内面は、屈曲部よりやや下がった位置からヘラ削りする。復元口径14.0cm。



第10图 2号整穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

18は口縁部がやや外反し、端部を丸くおさめる。口縁部内外面と、体部外面は粗いハケメ調整。口縁部外面はハケメ調整後ヨコナデする。体部内面は磨滅して不鮮明だが、ヘラ削りする。屈曲部付近はナデ調整。復元口径15.2cm。19は口縁部が直に立ち上がり、端部付近で外反する。体部外面に僅かにハケメが残る。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラ削り後ナデ調整、粘土接合痕が残る。復元口径16.0cm。

20は口縁端部を角張って仕上げる。内面にハケメが僅かに残る。外面はヨコナデ。

21～23は口縁部が屈曲部から外方へ開く。21は体部外面、口縁部内面をハケメ調整、口縁端部をヨコナデ、体部内面はヘラ削りする。復元口径16.4cm。22は体部外面ハケメ調整、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラ削り。復元口径18.0cm。23の口縁部外面はハケメ後ヨコナデ、内面はハケメ調整、体部内面はヘラ削り。外面にススが付着している。復元口径22.0cm。

24・25は口縁部が内湾し、雑なつくりである。直接接合しないが、同一個体の可能性がある。24の口縁部外面はハケメ調整後ナデ、体部外面はヘラ状工具によるナデ調整。口縁部内面はナデ調整、体部内面をヘラ削りする。復元口径13.2cm。25は口縁部内外面をヨコナデ、体部外面上半をヘラ状工具によるナデ調整、下半は削っているようであるが、器面が剥離しており不鮮明。体部内面はヘラ削り。復元口径16.0cm、体部最大径20.8cm。

26は口縁部がほぼ直に立ち上がる。口縁部は内外面ヨコナデ、体部外面上半はヘラ状工具による擦過。下半はユビナデ調整。体部内面はヘラ削りするが、屈曲部下は粘土接合痕がみられ、一部ヘラ削りが及んでいない。復元口径13.2cm、体部最大径19.4cm。

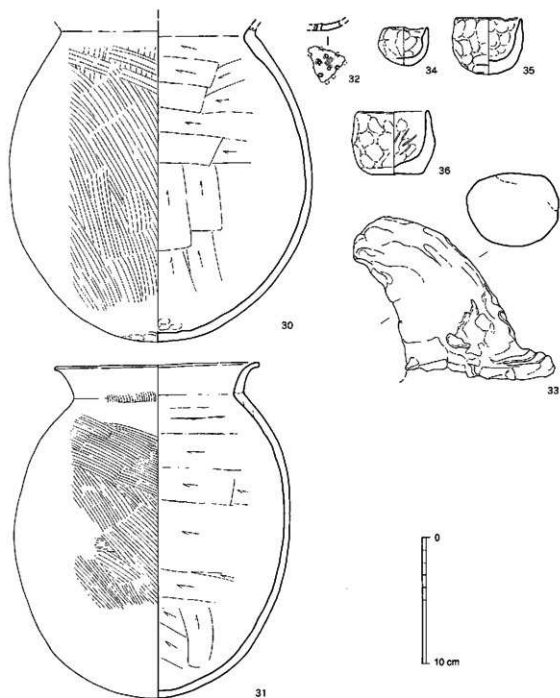
27・28は口縁部が屈曲部から外反し、端部をさらに外方へ引き出すようにまとめる。27の口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は磨滅して不明瞭だがヘラ状工具でナデ調整しているようである。体部内面屈曲部下はナデ調整で、粘土接合痕がみられる。下半はヘラ削り。復元口径16.4cm、体部最大径21.4cm。28は住居跡南西隅から出土し、図示したほかにも同一個体と思われる破片が数片出土している。口縁部外面はヨコナデ、体部外面上半は粗いハケメ調整、下半はヘラ状工具による擦過。口縁部内面はハケメ調整後ヨコナデ、体部内面は上半が上方向、下半が横方向のヘラ削り。復元口径17.4cm。

29は底部片で住居跡北東隅から出土した。体部外面は粗いハケメ調整、内面はヘラ削り。

30は口縁部を欠くが、外反する口縁部がつくとと思われる。外面屈曲部付近はヨコナデ、体部上半は粗いハケメ調整、底部はヘラ状工具でハケメをナデ消している。体部下半から底部にかけて、被熱により赤変。口縁部内面はナデ、体部はヘラ削りで、底部は指頭痕が残る。体部下半から底部に炭化物が付着している。体部最大径23.8cm。31は唯一全体の形状がわかるもので、中央土坑ならびにカマドから出土した。口縁部は外反し、端部はさらに外方に引き出すようにつくる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメ調整で被熱により赤変する。体部内面は屈曲部下をナデ調整、以下はヘラ削り。口径16.0cm、器高26.1cm、体部最大径21.9cm。

32は多穴式の甕の底部片で、カマド内の堆積土中から出土した。外面は磨滅しているが、わずかにハケメが確認できる。内面はナデ調整。孔径は約3mmで、外から内に向かって穿孔。穴の配置に規則性は認められない。

33は支脚。山陰系か。全体ナデ調整で仕上げる。雑なつくりで、指頭痕が残り、器面も必ずしも平滑でない。わずかだがススの付着がみられる。



第11図 2号壑穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

34～36はミニチュア土器。34は南東隅から、35と36はカマドの南側から出土した。35の底部外面と36の内面に工具痕が残る。

4号壑穴住居跡 (図版4、第12図)

調査区東部中央付近、2号住居跡の南西に位置する。1号溝より古い。1号溝の西岸に住居跡の西壁が確認できないことから、平面形は正方形と推測される。東壁は3.6mで、深さは0.15m前後を測る。

主柱穴は検出できなかったが、4本柱であろう。
住居跡中心から東寄りの位置に、炉跡と思われる浅い掘り込みを検出した。埋土は灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。東壁に沿って0.85m、南壁に沿って0.4mの壁小溝を検出した。深さは5cm前後である。

埋土は上層から、灰茶色粘質土、黒灰色粘質土、灰黄褐色粘質土である。土師器と須恵器が出土した。出土土器（図版10、第13図）

土師器（1～5） 1は坏の小片。体部外面下半を手持ちヘラ削り後、全体に雑なミガキを施す。内面はハケメ調整後、底部近くを中心にミガキを施し、工具痕が残る。

2・3は口縁部と体部の境が屈曲し、内面にふい後がつく鉢。2の口縁部外面は粗いハケメ後ナテ調整、体部外面は雑なハケメ調整で、体部下半はハケメ後ナテ調整する。口縁部内面はヨコナテ、体部内面は屈曲部よりやや下からヘラ削りする。復元口径

28.8cm。3は口縁部外面から体部外面上半をハケメ調整し、後口縁部内外面をヨコナテする。体部外面下半は工具によるナテ調整。体部内面は屈曲部やや下からヘラ削り。復元口径31.0cm。

4は小型の壺の小片。内外面とも磨滅して調整は不明だが、体部外面にふい後が残ることからヘラ削りしたと思われる。復元口径6.4cm。

5は小型で、底部に穴を一つもつ甔。住居跡の北東隅で出土した。口縁部は直に立ち上がる。口縁部外面はヨコナテ、体部外面上半はハケメ調整、下半はヘラ状工具による擦過。口縁部内面はハケメ調整、体部内面はヘラ削り。底部の穿孔は焼成前と思われる。口縁部から体部下半にかけて被熱のため赤変している。復元口径12.7cm、器高17.0cm。

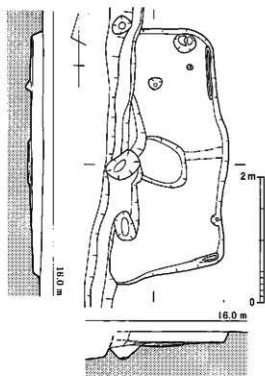
須恵器（6・7） 坏蓋片。どちらも、内外面ともにヨコナテ調整。7の復元口径は13.0cm。

5号壺穴住居跡（図版4、第14図）

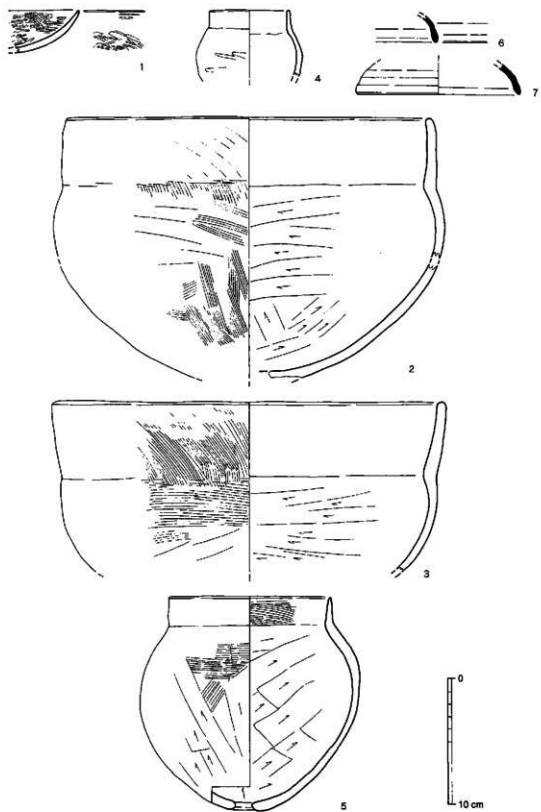
調査区南東部、東壁付近に位置する。7号住居跡、2号溝より新しい。平面形は南北に長い長方形で、北壁4.8m、西壁5.2mを測る。東壁と南壁の一部を近代の湿抜き溝に破壊されている。深さは0.25mである。主軸は5°西にふれる。

2号住居跡同様、掘削中常に地下水の影響で床面が乾くことがなかった。このため正確に床面を検出できず、屋内施設と一部の床下施設を同時に検出している。

北壁中央から東寄りの床面に焼土の広がりや土器片の散乱がみられ、北壁中央にカマドを付設していたと思われる。調査者の不注意でカマド本体は掘り過ぎてしまい、煙道しか検出できなかった。焼土層と床面の間には、灰褐色砂質土、暗灰黄褐色土（どちらも土器を含む）の堆積がみられ、火床ではなくカマド内から掻き出されたものである。

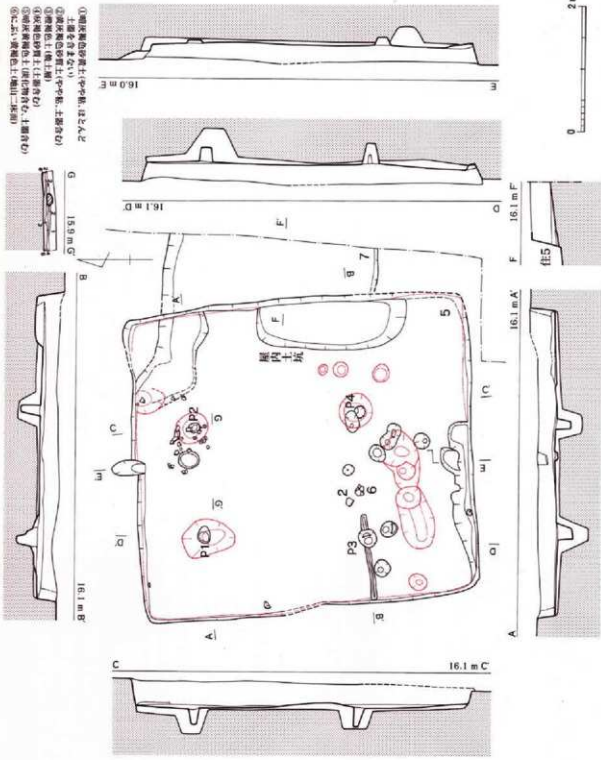


第12図 4号壺穴住居跡実測図（1/60）



第13圖 4号壑穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

- (1) 第一、二階：土間層、1・2・3
- (2) 第一階：土間層、1・2・3
- (3) 第一階：土間層、1・2・3
- (4) 第一階：土間層、1・2・3
- (5) 第一階：土間層、1・2・3
- (6) 第一階：土間層、1・2・3
- (7) 第一階：土間層、1・2・3
- (8) 第一階：土間層、1・2・3
- (9) 第一階：土間層、1・2・3
- (10) 第一階：土間層、1・2・3



第14圖 5・7号第六住居跡平面圖 (1/60)

煙道は幅0.25m、長さ0.5mを測るが、上半は削平され失われている。埋土中に焼土や炭化物の混入は認められず、天井部崩落の痕跡も確認できなかった。

主柱穴はP1～P4で、いずれも床面上で柱痕跡を確認し、床下で柱掘形を検出したが、P3のみ柱掘形を検出できなかった。柱間距離は、P1-P2間で1.7m、P1-P3間で2.5m、P2-P4間で2.6m、P3-P4間で2.1mである。P1-P3、P2-P4間の柱筋は座標軸の南北方向と一致するが、P1-P2、P3-P4間は北に5°ふれ、主軸と一致する。

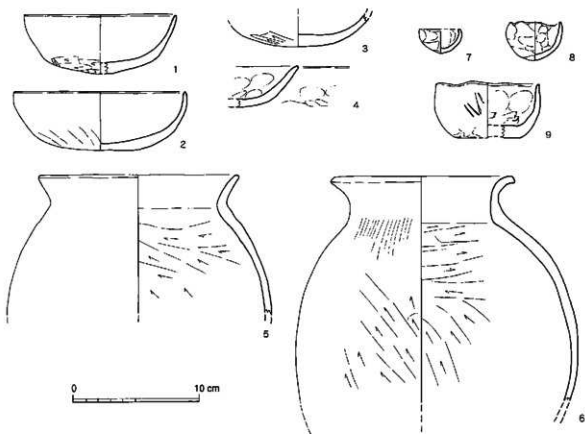
西壁とはほぼ直交し、P3のさらに東へ伸びる幅0.1mの溝を検出した。仕切り板の痕跡であろうか。東壁中央付近で屋内土坑を検出した。長軸2.3m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は灰褐色砂質土と暗灰褐色砂質土と灰黄褐色砂質土の混じったものであった。少量の土器片が出土している。

また、南壁に沿って不規則な形の掘り込みを検出した。埋土は暗灰茶色砂質土で、少量の土器片が出土した。壁小溝は不明。

住居跡の埋土は上層から暗灰褐色砂質土、黄灰褐色砂質土で、土師器が出土した。ほかに磨り石(第40図4)が出土した。

出土土器 (図版10、第15図)

土師器 (1～9) 1～4は坏。1は底部を手持ちへら削りするほかは、ほとんどの部分が磨滅して調整不明。復元口径12.0cm、器高4.6cm。2は口縁部をやや薄くつくる。全体に磨滅しているが、底部を手持ちへら削りする。復元口径13.7cm、器高4.6cm。3は底部片で、カマド前面から出土した。体部外面は工具によるナデか、ミガキ調整だが磨滅気味ではっきりしない。底部外面は手持ちへら削り。内面は磨滅して調整不明。



第15図 5号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

4は屋内土坑から出土した。口縁部が外方へ開き、器高が低い。全体に磨滅して調整は不明瞭だが、底部は手持ちヘラ削りのようである。内外面に指頭痕が残る。

5・6は甕。5は住居跡北東隅から出土した。口縁部が外方に開く。口縁部は内外面ヨコナア、体部外面はヘラ状工具による擦過、内面は屈曲部や下からヘラ削り。体部外面の一部の器壁が剥離している。復元口径15.4cm。6は口縁端部が大きく外反する。端部はやや角張って仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナア、体部外面上半は粗いハケメ調整、下半はヘラ状工具による擦過。内面はヘラ削り。復元口径14.0cm、体部最大径20.0cm。

7～9はミニチュア土器。7・8はカマド前面から出土した。9は平底で内外面に工具痕が残る。

6号竪穴住居跡 (図版4、第16図)

調査区北東部、1号住居跡の東に位置する。11号溝より新しい。大部分が調査区外に延びるため平面形は不明。埋土と地山の識別が難しく、若干壁を掘りすぎている。図中、本来の壁の下端を点線で示している。床面上で確認する東壁は4.0m、深さは0.45mを測る。主軸は20°東にふれる。

主柱穴はP1、P2で、その位置から4本柱であることが判る。柱間距離は2.3mを測る。埋土は黄褐色砂質土と暗灰褐色土が混じっており、炭化物と焼土粒を含んでいた。P1-P2間のピットはかなり柱に近く、炉跡とは考えにくい。壁小溝は不明。

床下には北壁と南壁に沿って幅0.9m、深さ0.1mほどの掘り込みがみられる。また、西壁に沿って幅0.5m、深さ0.1mほど溝状に掘り込んでいる。溝状掘り込みの南端にピットがあり、こぶし大の石が埋められていた。石に加工痕は認められない。

西壁南西隅付近に、埋没の過程で投げ込まれたと思われる多量の炭化物と焼土が確認できた。これに伴うような形で、壺の上半(第24図14)が出土した。

弥生土器のほかには磁石(第40図6)が出土した。

出土土器

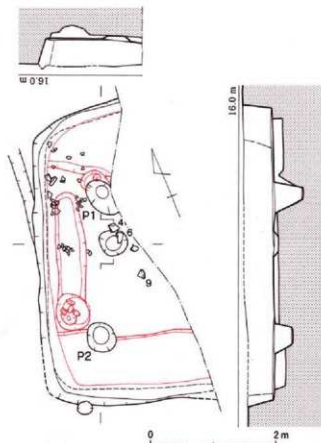
(図版11、第17・18図)

弥生土器 (1)

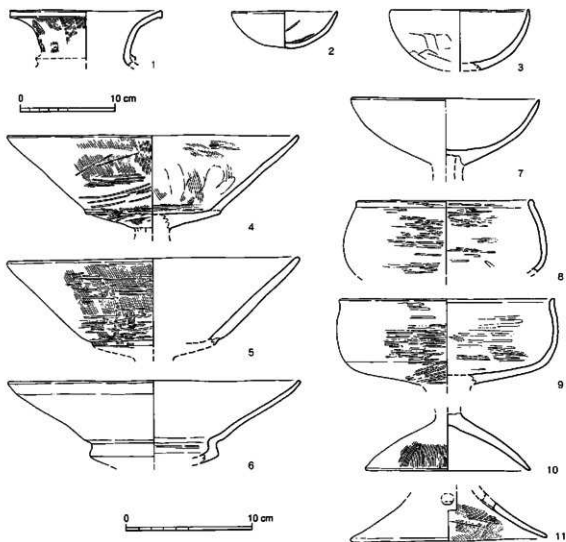
壺の口縁部片で混入品。口縁部外面はハケメ調整後ヨコナア、内面はヨコナア。頸部と体部の境の突帯が剥離している。復元口径16.0cm。

土師器 (2～22)

2・3は坏。2の内外面は磨滅が著しく、内面に工具痕が残るのみである。復元口径8.2cm、器高2.9cm。3は体部外面を手持ちヘラ削り、口縁部内外面と体部内面



第16図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第17図 6号壱穴住居跡出土土器実測図①(1は1/4, 他は1/3)

はナデ調整。復元口径11.0cm。

4~11は高坏。4・5は坏部の体部と底部の境が明瞭なタイプ。4は床面直上から出土した。外面を細かいハケメ調整後ヨコナデし、さらにミガキを施す。内面はハケメ調整後、ナデないしヨコナデする。復元口径23.0cm。5の外面はハケメ調整後ミガキを施す。内面は磨滅して調整不明。復元口径23.0cm。

6は畿内系高坏の坏部で、床面直上から出土した。全体に磨滅して調整は不明瞭だが、内面の一部にハケメが残る。復元口径23.0cm。

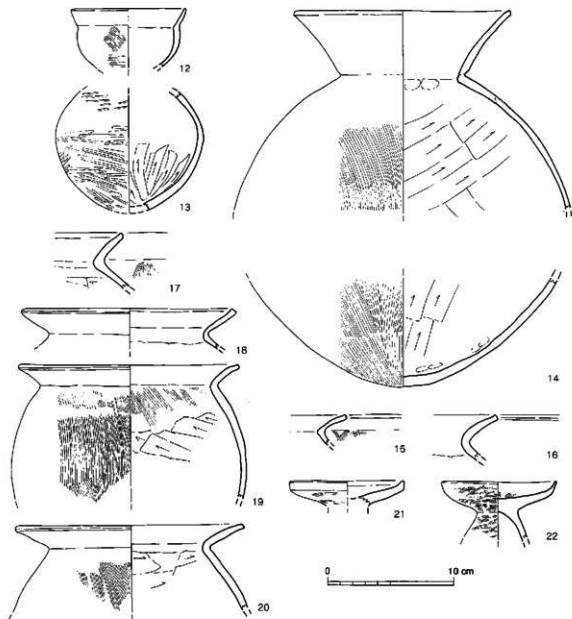
7は椀形の坏部をもつ高坏。床面直上から出土した。内外面とも磨滅著しく調整は不明。復元口径14.9cm。

8・9は内湾する椀形の坏をもつ、豊前系の高坏。8は内外面ともミガキ調整する。復元口径14.0cm。9は床面直上から出土した。内外面ともミガキ調整する。復元口径17.0cm。

10は脚部片。外面上半はミガキもしくは丁寧なナデ調整、下半はハケメ調整。内面はナデ調整。復元脚部径は13.0cm。11の外面は磨滅著しく調整不明。内面はハケメ調整。1箇所、穿孔が残る。復元脚部径15.4cm。

12~14は壺。12は小型の丸底壺。体部外面にハケメが残るほかは、磨滅して調整不明。復元口径9.0cm。13も小型の壺の体部。体部外面上半はタタキ後ナデ調整、下半は粗いミガキ調整。内面の上半はユビナデ、下半はヘラ状工具によるナデ調整。14は口縁部が大きく外方へ開き、球形の体部をもつ。西壁付近から、転げ込んだような状態で出土した。全体に磨滅気味で調整は不明瞭だが、口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメ調整。口縁部から体部下半にかけて、ススが付着する。体部内面の屈曲部はナデ調整、以下はヘラ削り。底部に指頭痕が残る。復元口径17.0cm。

15~20は甕。15は口縁端部を角張って仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り。16・17は口縁端部を上方に描み上げるように仕上げる。16の口縁部外面、内面上半はヨコナデ、下半はナデ調整。体部内面はヘラ削り。17の口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はヘラ削り、屈曲部はヘラ削り後ナデ調整。



第18図 6号塚穴住居跡出土土器実測図②(1/3)

18は口縁部が内湾し、端部をやや上方に摘み上げるように仕上げる。口縁部は磨滅して調整不明、体部内面は屈曲部よりやや下からへら削りする。復元口径17.0cm。

19・20は口縁部が大きく外方に開く。19の体部外面は細かいハケメ調整、口縁部外面から屈曲部にかけてヨコナデ調整。口縁部内面はナデ調整、体部内面上半はハケメ調整後ナデ調整、下半はへら削り。復元口径17.4cm。20は口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ調整する。体部内面は屈曲部をやや下からへら削り。口縁部が被熱により赤変する。復元口径18.0cm。

21・22は磨台。21は磨滅と磨面剥離のため調整不明瞭。外面にミガキ痕がわずかに残る。復元口径9.0cm。22は口縁部が内外面ともヨコナデ、外面はハケメ調整後雑なミガキで、磨面が平滑になっていない。内面も雑なミガキ調整。磨面内面はナデ調整。復元口径9.0cm。

7号壑穴住居跡 (図版4、第14図)

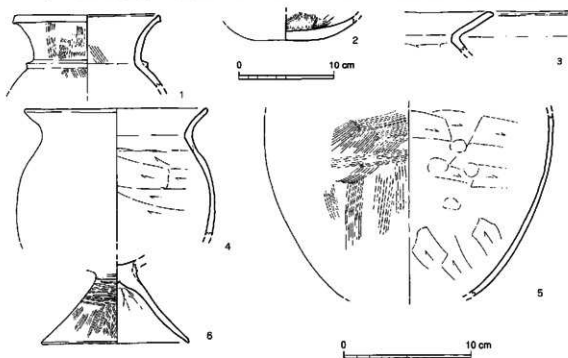
調査区東南部、東壁付近に位置する。5号住居跡より古い。その大部分が調査区外に延び、また5号住居跡に削平されているため、平面形は不明。北壁と南壁の距離は3.4m、深さは0.3mを測る。最も規模が近いのは4号住居跡である。

主柱穴を始め、住居内の施設はほとんど不明で、炉跡と思われる浅い掘り込みの一部を検出したにとどまる。

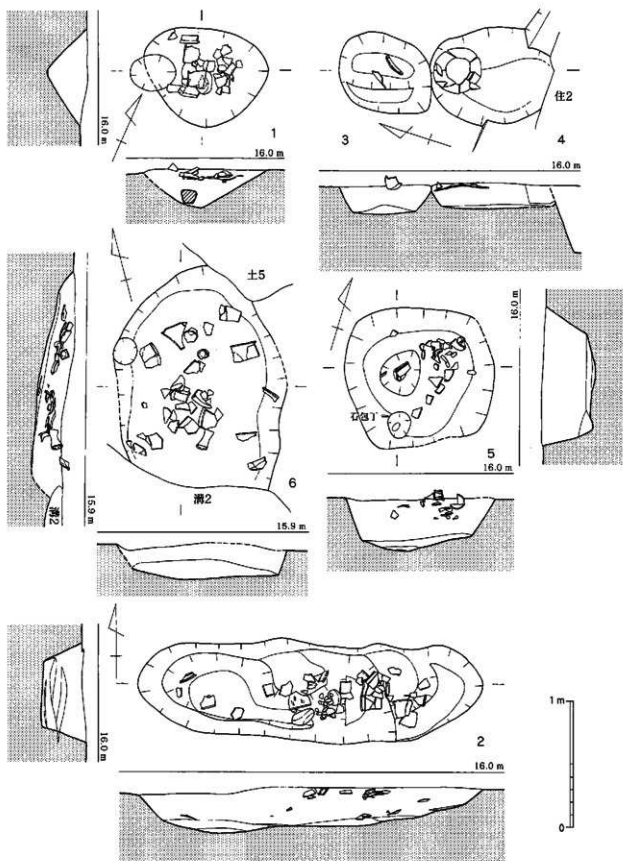
弥生土器と土師器が出土した。

出土土器 (図版11、第19図)

弥生土器 (1・2) 混入品である。1は壺の口縁部片。口縁端部を上方に摘み上げるように仕上げる。頸部の付け根に断面三角形突帯がめぐる。口縁端部はヨコナデ、頸部から体部にかけての外面はハケメ調整。内面は頸部にハケメが残るほかは、磨滅と器面剥離のため、調整不明。復元口径15.2cm。2は壺の底部片。底部外面はへら状工具によるナデ調整、体部外面は磨滅して不明瞭だが



第19図 7号壑穴住居跡出土土器実測図 (1・2は1/4、他は1/3)



第20图 1~6号土坑实测图 (1/30)

へら状工具による擦過か。内面はハケメ調整である。

土師器 (3~6) 3~5は甕。3は磨滅著しく、体部内面をへら削りすることがわかるのみである。4は口縁部が外反し、端部は丸く仕上げる。口縁部は内外面とも磨滅により調整不明。体部外面はへら状工具による擦過、内面はへら削り。粘土接合痕がみられる。復元口径14.4cm。5は体部片。外面はハケメ調整、下半はハケメ後ナデ調整する。内面はへら削りで、ところどころ指頭痕が残る。6は高坏脚部片。外面上半はミガキ調整、下半はハケメ調整。内面は磨滅している部分がほとんどだが、ナデ調整であることがわかる。復元脚部径11.6cm。

土坑

1号土坑 (図版5、第20図)

調査区東端中央付近に位置する、不整円形の土坑。長軸0.95m、短軸0.75m、深さ0.3mを測る。掘鉢状で底面は径0.1m。埋土は、上層がやや粘質の暗灰褐色砂質土、下層は地山とよく似た黄褐色砂質土である。どちらの層からも弥生土器が出土している。

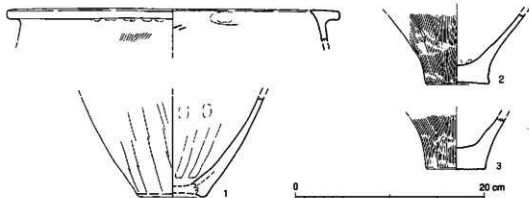
出土土器 (図版11、第21図)

弥生土器 (1~3) 1は口縁部片と体部下半の破片。胎土や焼成の状況がよく似ており同一個体と思われる。口縁部は端部を角張らせる逆L字状口縁で、内側に突出気味に仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデで、口縁部直下に指頭痕がめぐる。体部外面はハケメ調整だが、下半は磨滅して不明瞭。被熱により赤変している。内面はナデ調整、下半はなで上げた痕が残る。口縁部付近に工具痕が残る。復元口径37.2cm、復元底径7.0cm。

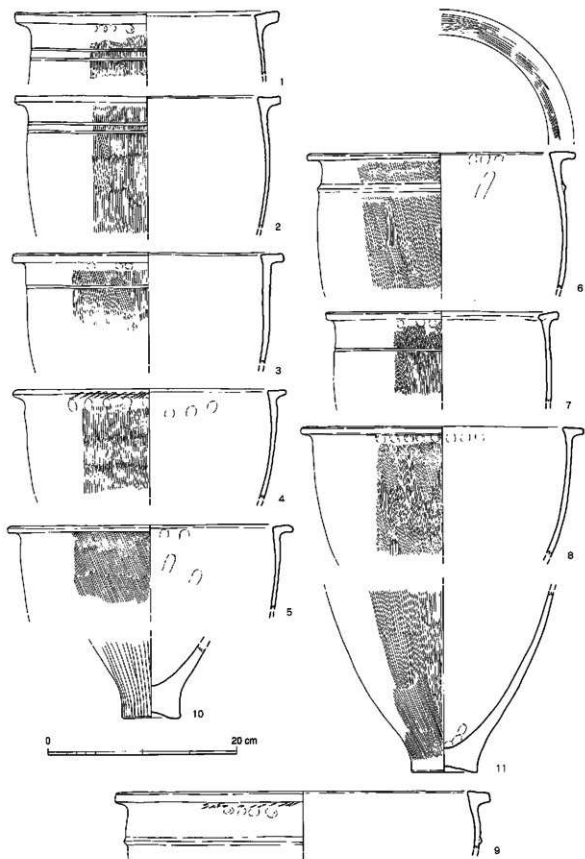
2はわずかに上げ底の底部片で、底面近くから出土した。体部外面はハケメ調整で、底部との境付近が被熱のため赤変している。底部外面はナデ調整、体部内面はナデ調整、底部内面は指オサエで指頭痕が残る。底径6.5cm。3は平底。体部外面はハケメ調整で被熱のため赤変している。底部は内外面ともナデ調整。底径6.4cm。

2号土坑 (図版5、第20図)

調査区東端中央よりやや南、1号土坑の南に位置する楕円形の土坑。底面はゆるい段状で、西端が最も深い。長軸2.65m、短軸0.8m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は上層から、炭化物を少量含む暗灰褐色土、地山によく似た黄褐色砂質土、炭化物を含む暗灰褐色砂質土である。どの層からも弥生土器が出土している。



第21図 1号土坑出土土器実測図 (1/4)



第22图 2号土坑出土土器实测图 (1/4)

出土土器 (図版12、第22図)

弥生土器 (1~11) すべて甕。1~3・7・9は口縁端部を角張って仕上げる逆L字状口縁。口縁部を内側に突出気味に仕上げる、体部が内傾するなど鋤先状口縁への志向が観察できる。1~3・7の口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケメ調整後、沈線が断面三角形突帯を巡らせる。体部内面はナデ調整。1の口縁部、3の体部内面が被熱のため赤変している。復元口径は1・2が28.0cm、3が28.8cm、7は24.6cm。9は口縁部直下に工具痕がめぐり、体部外面をナデ調整している。復元口径39.6cm。

4は口縁部を短くつくる。体部外面のハケメ調整が口縁部までおよび、口縁部直下に指頭痕が残る。口縁部は内外面ともヨコナデ、内面はナデ調整。復元口径28.9cm。

5・6は口縁端部を丸みをもって仕上げる逆L字状口縁。5は口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整。復元口径30.0cm。6は口縁部平坦面、体部外面をハケメ調整。断面三角形突帯を貼付する。内面はナデ調整。復元口径28.2cm。

8は口縁部を内側に突出させる。口縁部直下に指頭痕がめぐり、口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整。内面は磨滅気味で不明瞭だがナデ調整であろう。復元口径30.0cm。

10・11は上げ底の底部片。10は体部外面を粗いハケメ調整、底部外面をナデ調整する。内面は磨滅のため調整不明。底径6.2cm。11は体部外面をハケメ調整、底部との境付近はヨコナデ、底部外面はナデ調整する。内面は磨滅して不明瞭だがナデ調整。底径6.95cm。

3号土坑 (図版6、第20図)

調査区北東部、2号住居跡北西隅の北に位置する円形の土坑。4号土坑と接し、2号溝より新しい。底面が窪んでいるが、2号溝の埋土を誤って掘削したためである。本来は、4号土坑のように平らであったと思われる。径約0.7mを測り、本来の深さは0.15m。

高坏の坏部片 (第23図2) と脚部片 (4) が、横に倒した高坏の、ちょうど脚柱部分を欠いた配置で出土した。4号土坑出土の高坏口縁部 (第23図1) と同一個体である。

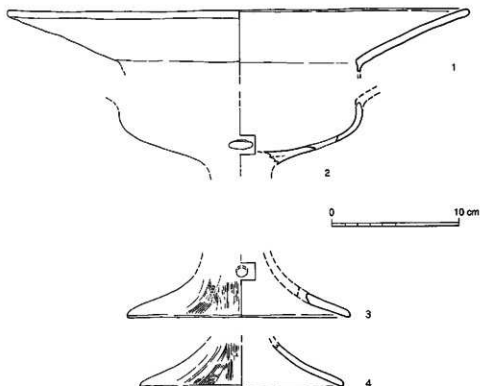
出土土器 (図版12、第23図)

土師器 (2・4) 2は、1と同一個体の高坏坏部片で、約1/2が残存している。大きく外反する長い口縁部 (1) との接合部分がはかれている。内外面とも磨滅著しく調整不明。底部付近に径2cmほどの円孔がある。磨滅して判然としなが、焼成後に穿孔した可能性がある。4は2と同一個体の高坏脚部片で、1/2弱が残存している。磨滅気味で不明瞭だが、外面はハケメ後ミガキ調整、内面はナデ調整である。復元脚部径16.0cm。

4号土坑 (図版6、第20図)

調査区北東部に位置する不整円形の土坑。2号住居跡より古く、2号溝より新しい。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。

先述したとおり、3号土坑から出土した高坏 (第23図2・4) の口縁部分の完形が、伏せた状態で出土した。高坏脚部片 (3) も出土し、3号土坑出土のものと直接接合しないものの、胎土、調整などがよく似ており、同一個体と考えてよいであろう。それぞれに実測したため復元径が異なる。



第23図 3・4号土坑出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版12、第23図)

土師器 (1・3) 1は内外面とも磨滅が著しく調整不明。坏部との接合部分からはがれている。口径36.3cm。3は1と重なるように、数片の破片の状態で出土した。約1/2が残存する。磨滅気味だが、外面はハケメ後ミガキ調整、内面はナデ調整。穿孔が2ヶ所確認できる。孔の位置から、3ヶ所に穿孔されていたと思われる。復元径17.6cmと、4とは1.2cmのずれがあり、また4には穿孔が確認できないが、胎土、調整などが似通っており、同一個体と考えられる。

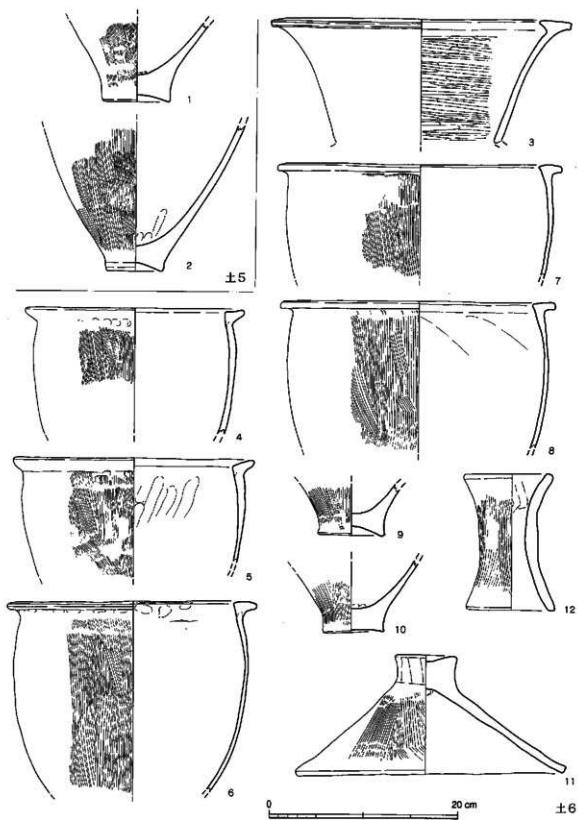
5号土坑 (図版6、第20図)

調査区南東部、5号住居跡の西に位置する不整円形の土坑。2号溝より古い。径約1.1m、深さ0.4mを測る。

埋土は暗灰褐色砂質土で、弥生時代の遺構の中では、比較的検出しやすかった。弥生土器がままとまって出土したが、全て中位より上層から出土した。ほかに石甕丁片 (第40図1) が出土している。

出土土器 (図版13、第24図)

弥生土器 (1・2) 1・2とも上げ底の甕の底部片で、体部外面をハケメ調整後、底部近くをヨコナデする。底部外面はナデ調整。内面はナデ調整で底部付近に指頭痕が残る。1の底径7.1cm、2の復元底径5.8cm。



第24图 5·6号土坑出土土器实测图 (1/4)

6号土坑 (図版6、第20図)

調査区南東部、5号土坑の南に位置する不整形形の土坑。5号土坑、1号溝より古い。長軸は残存部分で1.9m、短軸1.3m、深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色砂質土と地山によく似た黄褐色砂質土で、検出が大変難しかった。土坑の壁、底が検出できたと判断し、清掃していると土器が出土するような状況で、平面形や壁の立ち上がりやや不正確である。

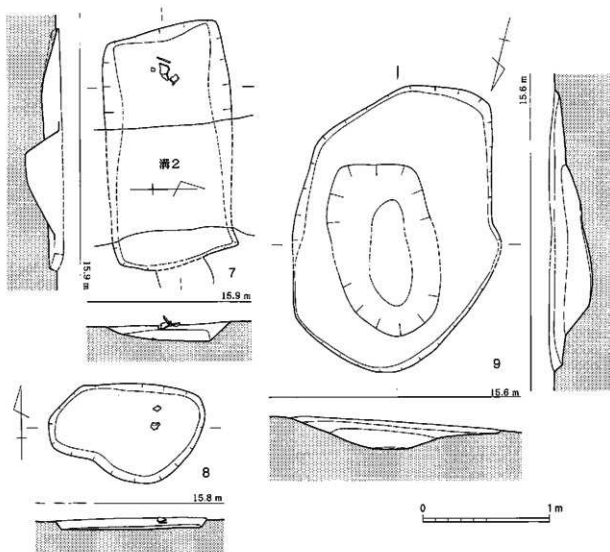
完形の物を含む弥生土器がまともに出てきた。

由土土器 (図版13・14、第24図)

弥生土器 (3~12) 3は広口壺の頸部。鋤形口縁で、端部を若干窪ませる。頸部外面はナデ調整、口縁部から頸部内面はミガキ調整。口径31.6cm。

4~10は甕。4は断面三角形状でやや上方に引き出す口縁をもつ甕。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整。外面口縁直下に指頭痕が残る。復元口径23.0cm。

5の口縁部は上方に引き出すように外反する。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整後部分的にナデ調整、口縁部直下に指頭痕が残る。体部内面はナデ調整で、ナデ痕が残る。復元口径25.4cm。



第25図 7~9号土坑実測図 (1/30)

6は短い逆L字状口縁である。口縁部はハケメ後ヨコナデ調整、体部外面はハケメ調整。口縁部直下に指頭痕が残る。体部内面はナデ調整で、指頭痕と粘土織ぎ日かみとめられる。口径26.3cm。

7の口縁部は短い逆L字状で、内傾する。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整後部分的にナデ調整する。内面はナデ調整。復元口径30.0cm。

8も逆L字状口縁で、内傾する。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、口縁部直下に指頭痕が残る。体部内面はナデ調整。また、口縁直下と体部外面下半が被熱により赤変している。

9・10は上げ底の壺底部。体部外面をハケメ調整後、底部付近をヨコナデする。底部内外面、体部内面はナデ調整。底径は9が7.0cm、10が6.4cm。

11は蓋。つまみ部外面はへら状工具で面取り、体部はハケメ調整。口縁端部をヨコナデし、角張って仕上げる。内面はナデ調整で、指頭痕が残る。外面の一部が被熱により赤変。復元口径28.7cm、器高12.7cm。

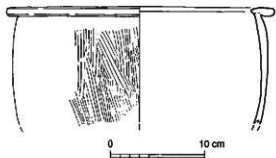
12は支脚の完形品。外面はハケメ調整後、端部付近をヨコナデする。内面はへら状工具で掻き出すように成形後、ナデ調整。口径、底径ともに9.4cm、器高14.7cm。

7号土坑 (図版7、第25図)

調査区東南部に位置する方形の土坑。2号溝より古い。平面形は整っているが、深さは一定しない。長軸1.8m、短軸1.0m、深さ0.06~0.15mを測る。弥生土器片が少量出土している。

出土土器 (図版14、第26図)

弥生土器 口縁端部を角張って仕上げる鋤先形口縁。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整。復元口径28.2cm。



第26図 7号土坑出土土器実測図 (1/4)

8号土坑 (図版7、第25図)

調査区東南部、7号土坑の南に位置する不整形の土坑。長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.05mを測る。弥生土器片が少量出土したが、いずれも小片である。

9号土坑 (図版7、第25図)

調査区東端中央付近、水田跡に向かって傾斜する斜面上に位置する楕円形の土坑。水田跡の土壌化した層が畦畔状に見える部分の、その真上にある。13号溝より新しい。13号溝の埋土、水田跡の土壌化した層との識別が難しく、平面形がやや不正確である。長軸2.2m、短軸1.6m、深さ0.15mを測る。上層から多く土器が出土しているが、いずれも小片である。

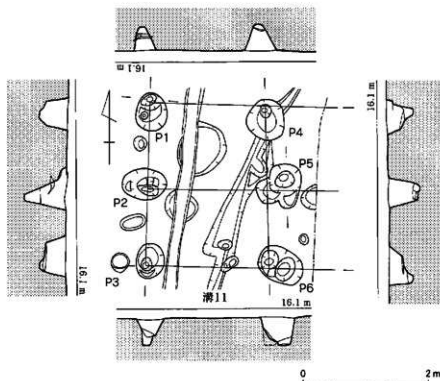
掘立柱建物 (第27図)

調査区北東部に位置する。梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物で調査区外に延びる。

柱間距離は、梁行き方向のP1-P3間が1.4m、P3-P5間が1.2m、P2-P4間が1.38m、P4-

P6間が1.24mである。桁行き方向のP1-P2間が1.84m、P3-P4間が1.9m、P5-P6間が1.98mである。主軸は1°5'北にふれる。

埋土は暗褐色粘質土で、一様に埋まっており柱痕跡は認められなかった。Pから土器片が出土している。埋土の状況から古墳時代中期であろう。



第27図 掘立柱建物実測図 (1/60)

溝

1号溝 (第3・28図)

調査区東部に位置す

る南北溝。4号住居跡、2・3号溝より新しい。ほぼ地形に沿ってのびるが、2号住居跡付近で東へ大きく方向を変える。

幅は1.2~1.8mだが、5号住居跡付近だけ4.0mほどに広がる。深さは0.5mを測る。湧水が激しく深さはやや不正確であるが、全体の地形が北から南に傾斜しているので南流したものと思われる。立ち上がりはあまり急ではなく、ところどころテラス状の段をもつ。5号住居跡付近がなぜ急に幅が広がるのかはよく判らない。別の遺構との切り合い関係も想定されたが、土層を観察すると砂質土を中心とした埋土で、溝であったのは間違いないようである。何らかの理由で、部分的に拡張されたものだろうか。

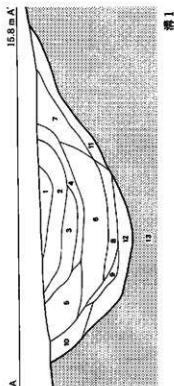
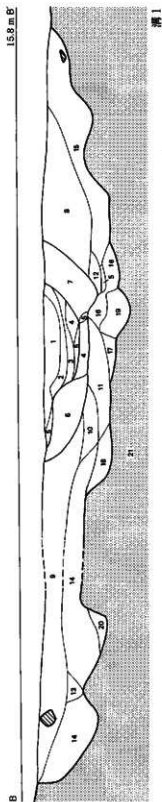
弥生土器、土師器が出土したが、量はあまり多くない。

出土土器 (図版14、第29図)

弥生土器 (1~11) 1は頸部付け根に刺突文がめぐる壺。暗褐色土層から出土した。外面はハケメ調整。頭部内面は磨滅して調整不明、体部内面はハケメ調整後、一部ナデ調整。最大体部径26.7cm。

2~10は甕。2・3は断面三角形の口縁をもつ。2の外面はヨコナデ、内面はナデ調整。復元口径32.0cm。3は磨滅著しく調整不明。被熱により赤変している。復元口径33.0cm。

4~6は上げ底の底部片。4の体部外面はハケメ調整、底部内外面はナデ調整。復元底径7.0cm。5の体部外面はハケメ調整、底部内外面ともナデ調整。底径6.0cm。6はわずかに上げ底で底部が厚い。磨滅著しく調整は不明。被熱により外面全体が赤変している。復元底径6.6cm。

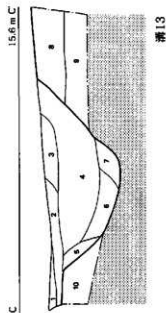


層 1 A-A'

- ① 灰白色砂土
- ② 灰白色砂岩
- ③ 灰白色砂岩
- ④ 灰白色砂岩
- ⑤ 灰白色砂岩
- ⑥ 灰白色砂岩
- ⑦ 灰白色砂岩
- ⑧ 灰白色砂岩
- ⑨ 灰白色砂岩
- ⑩ 灰白色砂岩
- ⑪ 灰白色砂岩
- ⑫ 灰白色砂岩
- ⑬ 灰白色砂岩

層 1 B-B'

- ① 灰白色砂岩
- ② 灰白色砂岩
- ③ 灰白色砂岩
- ④ 灰白色砂岩
- ⑤ 灰白色砂岩
- ⑥ 灰白色砂岩
- ⑦ 灰白色砂岩
- ⑧ 灰白色砂岩
- ⑨ 灰白色砂岩
- ⑩ 灰白色砂岩
- ⑪ 灰白色砂岩
- ⑫ 灰白色砂岩
- ⑬ 灰白色砂岩
- ⑭ 灰白色砂岩
- ⑮ 灰白色砂岩
- ⑯ 灰白色砂岩
- ⑰ 灰白色砂岩
- ⑱ 灰白色砂岩
- ⑲ 灰白色砂岩
- ⑳ 灰白色砂岩
- ㉑ 灰白色砂岩
- ㉒ 灰白色砂岩
- ㉓ 灰白色砂岩
- ㉔ 灰白色砂岩
- ㉕ 灰白色砂岩
- ㉖ 灰白色砂岩
- ㉗ 灰白色砂岩
- ㉘ 灰白色砂岩
- ㉙ 灰白色砂岩
- ㉚ 灰白色砂岩
- ㉛ 灰白色砂岩
- ㉜ 灰白色砂岩
- ㉝ 灰白色砂岩
- ㉞ 灰白色砂岩
- ㉟ 灰白色砂岩
- ㊱ 灰白色砂岩
- ㊲ 灰白色砂岩
- ㊳ 灰白色砂岩
- ㊴ 灰白色砂岩
- ㊵ 灰白色砂岩
- ㊶ 灰白色砂岩
- ㊷ 灰白色砂岩
- ㊸ 灰白色砂岩
- ㊹ 灰白色砂岩
- ㊺ 灰白色砂岩
- ㊻ 灰白色砂岩
- ㊼ 灰白色砂岩
- ㊽ 灰白色砂岩
- ㊾ 灰白色砂岩
- ㊿ 灰白色砂岩

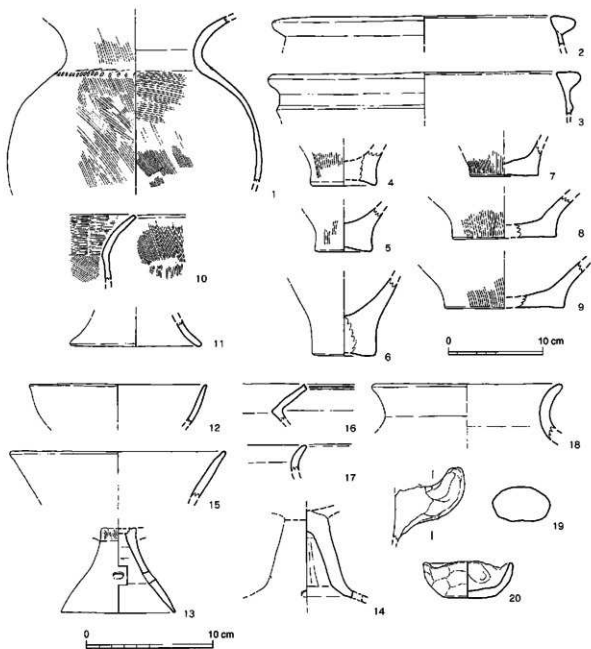


- 層 13
- ① 灰白色砂岩と黒色砂岩のまじり (四層おおよし層)
 - ② 灰白色砂岩
 - ③ 灰白色砂岩
 - ④ 灰白色砂岩
 - ⑤ 灰白色砂岩
 - ⑥ 灰白色砂岩
 - ⑦ 灰白色砂岩
 - ⑧ 灰白色砂岩
 - ⑨ 灰白色砂岩
 - ⑩ 灰白色砂岩

- 層
- ① 灰白色砂岩
 - ② 灰白色砂岩
 - ③ 灰白色砂岩
 - ④ 灰白色砂岩
 - ⑤ 灰白色砂岩
 - ⑥ 灰白色砂岩
 - ⑦ 灰白色砂岩
 - ⑧ 灰白色砂岩
 - ⑨ 灰白色砂岩
 - ⑩ 灰白色砂岩
 - ⑪ 灰白色砂岩
 - ⑫ 灰白色砂岩
 - ⑬ 灰白色砂岩
 - ⑭ 灰白色砂岩
 - ⑮ 灰白色砂岩
 - ⑯ 灰白色砂岩
 - ⑰ 灰白色砂岩
 - ⑱ 灰白色砂岩
 - ⑲ 灰白色砂岩
 - ⑳ 灰白色砂岩
 - ㉑ 灰白色砂岩
 - ㉒ 灰白色砂岩
 - ㉓ 灰白色砂岩
 - ㉔ 灰白色砂岩
 - ㉕ 灰白色砂岩
 - ㉖ 灰白色砂岩
 - ㉗ 灰白色砂岩
 - ㉘ 灰白色砂岩
 - ㉙ 灰白色砂岩
 - ㉚ 灰白色砂岩
 - ㉛ 灰白色砂岩
 - ㉜ 灰白色砂岩
 - ㉝ 灰白色砂岩
 - ㉞ 灰白色砂岩
 - ㉟ 灰白色砂岩
 - ㊱ 灰白色砂岩
 - ㊲ 灰白色砂岩
 - ㊳ 灰白色砂岩
 - ㊴ 灰白色砂岩
 - ㊵ 灰白色砂岩
 - ㊶ 灰白色砂岩
 - ㊷ 灰白色砂岩
 - ㊸ 灰白色砂岩
 - ㊹ 灰白色砂岩
 - ㊺ 灰白色砂岩
 - ㊻ 灰白色砂岩
 - ㊼ 灰白色砂岩
 - ㊽ 灰白色砂岩
 - ㊾ 灰白色砂岩
 - ㊿ 灰白色砂岩



第28図 1・13号線上層実測図 (1/20)



第29図 1号溝出土土器実測図 (12~16・18~20は1/3, 他は1/4)

7~9は平底の底部片。いずれも体部外面はハケメ調整、底部内外面、体部内面はナデ調整。7の底径7.1cm、8の復元底径11.0cm、9の復元底径12.6cm。

土師器 (12~20) 12は坏部片。全体磨滅して調整不明。復元口径14.0cm。

13・14は高坏脚部片。13は、脚部外面は磨滅して調整不明。内面は回転ヘラ削りて成形するが、調整は磨滅して不明。1ヶ所穿孔。坏部との接合部分が剥離しており、剥離部分にハケメが観察できる。坏底部はミガキ調整している。復元底径9.0cm。14は脚端部が大きく広がる。外面は磨滅のため調整不明。内面はナデ調整。穿孔が2ヶ所残る。穿孔の位置から本来、3ヶ所であったと思われる。

15は畿内系壺の口縁部片。磨滅のため調整不明。復元口径17.0cm。

16～18は甕の口縁部片。16は口縁端部を沈線上に窪ませる。口縁部内外面、体部外面はヨコナテ、体部内面はヘラ削り。17は端部を丸く仕上げる。磨滅著しく調整不明。18もまた端部を丸く仕上げる。口縁部はヨコナテ、体部内面はヘラ削り。被熱のため変変。復元口径15.0cm。

19は甕の把手片。全体ナテで仕上げる。内面は磨滅して調整不明。

20はミニチュア土器。外面ヘラ状工具で成形後ナテ調整、内面はナテ調整で指頭痕が残る。

2号溝 (第3図)

調査区東部、1号溝の東に位置する南北溝。2・5号住居跡、3・4号土坑、1・9号溝より古く、7号土坑より新しい。ほぼ地形に沿ってのび、断面は皿状である。幅0.5～0.8m、深さ0.15～0.2mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

弥生土器、土師器が出土したが、出土量は多くない。

出土土器 (第30図)

弥生土器 (1～6) 1は広口壺の口縁部片。平坦面をつくり、内側を揃み上げるように成形。端部は若干窪ませる。内外面ともヨコナテで、外面に指頭痕が残る。

2～6は甕。2は断面三角形の口縁で、調整は磨滅して不明。3は逆し字状口縁で端部を角張って仕上げる。磨滅により調整不明。4は口縁部が内側に突出するが、外側にはあまり伸びない。口縁部は内外面ともヨコナテ、体部外面は磨滅して調整不明、内面はナテ調整。5は口縁部が内側にわずかに突出する鋤先状口縁。内外面ともヨコナテで、外面に指頭痕が残る。復元口径26.0cm。

6は大型の甕の口縁部片。口縁は直立に近く、端部に刻み目を施す。内外面ともハケメ調整。

土師器 (7) 小型の壺であろう。磨滅著しく調整不明。復元口径13.0cm。後世の流れ込みである。

3号溝 (第3図)

調査区東部に位置する南北溝。1号溝より古い。1号溝と交差するかと思われたが、延長が確認できなかった。幅は1号溝とほぼ同じ1.5mだが、非常に浅く、深さはわずか5cmほどである。1号溝が本溝との合流部分から方向を変えることから、掘削途中で方向を転じたものであろうか。

埋土は灰褐色土。ごく少量の土器片が出土した。

出土土器 (第30図)

土師器 (8) 椀形の坏部がつく高坏の脚部か、台付き鉢の脚部である。外面は磨滅気味だが、面取り後ミガキ調整しているのがわかる。内面は磨滅して調整不明。

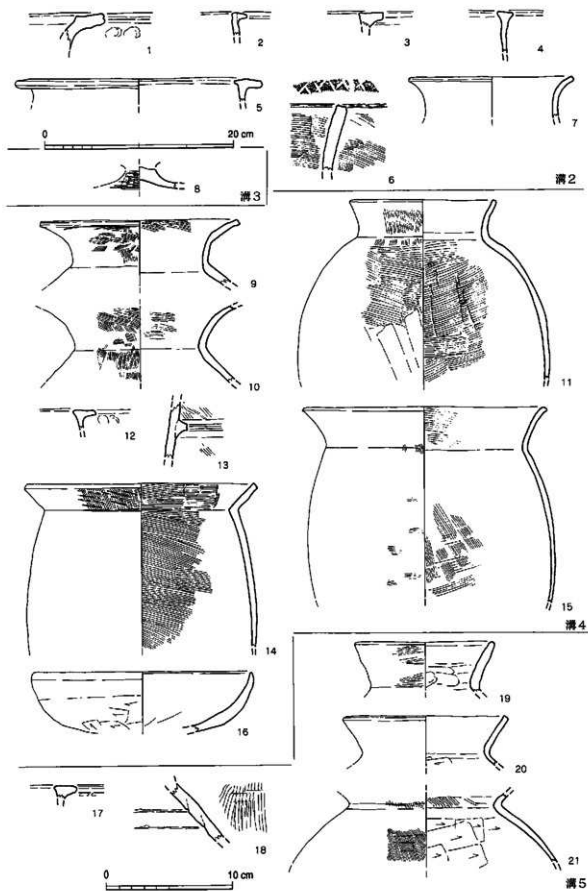
4号溝 (第3図)

調査区北東部に位置する東西溝。2号住居跡より古い。2号住居跡の西には延長が確認できなかった。幅0.9m、深さ0.6mを測る。

埋土は暗灰褐色砂質土である。弥生土器、土師器が出土した。

出土土器 (図版14、第30図)

弥生土器 (9～15) 9・10は畿内系の壺口縁部片。どちらも、口縁部は内外面ともハケメ後、一部ヨコナテあるいはナテ調整する。体部外面はハケメ調整、内面はナテ調整。9の復元口径21.0cm、復元頸部径14.2cm。10の復元頸部径14.0cm。これらは胎土、調整が似通っており、同一個体の可



第30图 2~5号溝出土土器実測図 (7・16・18・19~21は1/3, 他は1/4)

能性がある。

11は直口壺。口縁端部はやや角張って仕上げる。口縁部外面はハケメ後ヨコナデ、体部外面上半は雑なハケメ調整、下半はへら状工具による擦過。被熱により体部が黒変、一部器壁が剝離している。口縁部内面は磨滅により調整不明、体部内面はハケメ調整。復元口径15.4cm。

12～15は甕。12は口縁部が内側にやや突出する、逆L字状口縁。外面はヨコナデで指頭痕が残る。内面は磨滅により調整不明。13は大型の甕の体部片。外面は粗いハケメ調整で、断面M字状の突帯を貼付する。内面はナデ調整。

14・15は外方にひらく口縁部をもつ甕。14の口縁部外面はハケメ後、ヨコナデするが、一部タタキ痕が残る。体部外面上半はタタキ、下半はへら状工具による擦過。内面は口縁部から体部上半がハケメ調整、下半はハケメ後ナデ調整。復元口径24.6cm。15は口縁部外面が磨滅して調整不明。体部外面も磨滅しているが、ハケメ調整したことがわかる。内面もハケメ調整。復元口径25.7cm。
土師器 (16) 坏片で、口縁部から体部上半をヨコナデ、体部下半を手持ちへら削りする。内面は工具によるナデ調整で、工具痕がうっすら残る。復元口径17.0cm。

5号溝 (第3図)

調査区北東部、1号住居跡の南に位置する東西溝。竪穴状遺構より古く、竪穴状遺構より西に延長を確認できなかった。幅0.3m、深さ0.1mを測る。弥生土器、土師器が出土した。

出土土器 (第30図)

弥生土器 (17) 甕の口縁部小片。口縁部が内側に若干突出する。ヨコナデで、外面に指頭痕が残る。

土師器 (18～21) 18は甕の体部片。外面は粗いハケメ調整で、後軽くヨコナデする。内面は磨滅して不明瞭だが、へら削りしている。

19は小型の甕の口縁部片。口縁端部付近はヨコナデ、外面はハケメ後ヨコナデ、内面は雑なナデ調整。復元口径11.0cm。20は口縁端部を内側に摘み上げ気味に、角張って仕上げる。口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部内面は屈曲部や下からへら削り。復元口径12.0cm。21は口縁部を欠くため、口縁端部の形状は不明。外面はハケメ調整で、後屈曲部付近をヨコナデする。口縁部内面はハケメ後ヨコナデ、体部内面は屈曲部や下からへら削りする。

6号溝 (第3図)

調査区北東部、4号住居跡の北に位置する短い東西溝。2号住居跡より新しい。長さ1.25m、幅0.3m、深さ0.18mを測る。遺物は出土しなかった。

7号溝 (第3図)

調査区北東部、2号住居跡の南に位置する、北東—南西方向の溝。2号住居跡、2号溝より古い。幅0.3m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

8号溝 (第3図)

調査区北東部、4号溝の南に位置する東西溝。2号住居跡より古く、2号住居跡の西には延長を確

認できなかった。幅0.6m、深さは約5cmとごく浅い。少量の土器片が出土したが図示できるものはない。

9号溝 (第3図)

調査区南東部に位置する北東-南西方向の溝。2号溝より新しく、1号溝との関係は不明。幅1.4~2.0mを測る。埋土は通常の溝の堆積状況とは異なり、暗褐色粘質土と褐色砂が不規則に入り混じり、土層境界が垂直になる部分すらあった。この状況は、水田跡の項でも述べるが地震による噴砂あるいは液化現象によるもので、本来は暗褐色粘質土の埋土をもつ溝であろう。

土器片が出土したが、図示できるものはない。埋土から古墳時代中期の遺構である。

10号溝 (第3図)

調査区東部中央付近に位置する短い東西溝。2号溝より古い。幅0.35m、深さ0.1mを測る。少量の土器片が出土したが、図示できるものはない。

11号溝 (第3図)

調査区北東部に位置する南北溝。1号住居跡、掘立柱建物より古い。幅0.2m、深さ0.2mを測る。少量の土器片が出土した。

12号溝 (第3図)

調査区北東部、2号住居跡北壁付近に位置する、短い南北溝。2号住居跡より新しい。長さ1.4m、幅0.4m、深さ0.15mを測る。

埋土は暗褐色粘質土で、2号住居跡の埋土の一部と酷似している。住居跡掘削中に平面形を検出し、別の遺構と認識した。ごく少量の土器片が出土した。

13号溝 (第3・36図)

調査区東部、傾斜面に位置する南北溝。水田跡の畦畔1とした土壌化層の除去後に検出した。9号土坑より古い。幅1.2m、深さ0.25mを測る。

埋土は上層から淡灰色微砂、灰色微砂(土壘含む)、灰褐色微砂である。弥生土器、土師器が出土した。

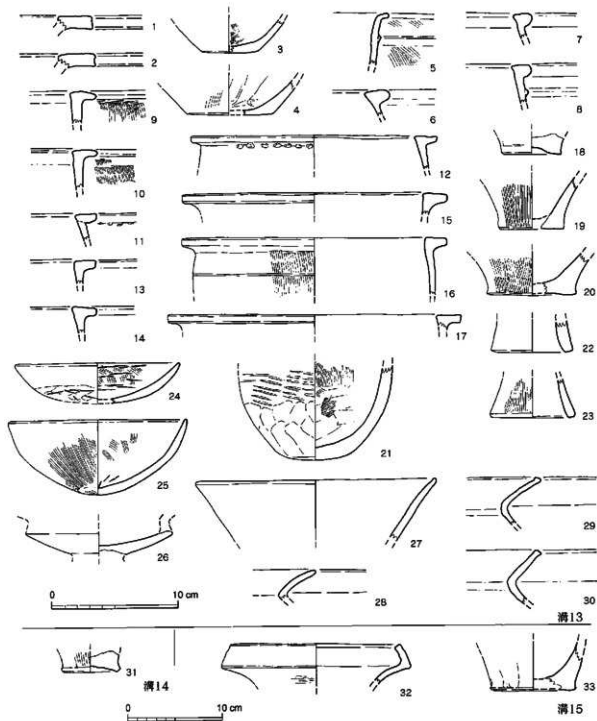
出土土器 (図版14、第32図)

弥生土器 (1~23) 1~4は葎。1・2は平坦面をつくり、端部を若干窪ませる口縁部小片。2は内側にわずかに突出させる。調整はどちらもヨコナテ。3は底部端に丸みをおびている。外面は磨滅して調整不明。内面はハケメ後ナテ調整。外面は被熱により赤変している。復元底径6.0cm。4は完全な平底で、体部外面はハケメ後ナテ調整、底部外面は磨滅して調整不明。内面は指による強いナテ調整。復元底径8.9cm。

5~20は甕。5は如意形口縁の甕。体部外面をハケメ調整後、断面三角凸帯を貼付する。口縁部はヨコナテ、内面はナテ調整。口縁部内面が被熱のため赤変している。6~8は断面三角形の口縁で、口縁部内面を強くヨコナテすることで内側に突出気味につくる。6は内外面ともヨコナテ、

7は口縁部の内外面をヨコナデ、体部内面をナデ調整する。8は全面ヨコナデ。

9～12は断面逆L字状口縁。9・10は端部を下がり気味に、11・12は端部を上がり気味につくる。9・10の口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整。11・12の口縁部はヨコナデ、体部外面は磨滅して調整不明、内面はナデ調整。口縁部直下に指頭痕がめぐる。12は被熱している。復元口径26.0cm。



第31圖 13～15号溝出土土器実測図 (24～30は1/3、他は1/4)

13~17は断面逆L字状口縁で、端部を角張って仕上げる。14と17は内面を強くヨコナデすること、内側に突出気味につくる。いずれも口縁部はヨコナデ。16は体部外面をハケメ調整し、沈線が1条めぐる。体部内面はナデ調整。復元口径は、15・16が28.0cm、17が31.0cm。

18~20は底部片。18は上げ底の底部片で、体部外面はハケメ後ヨコナデ、底部外面はナデ調整。割れのため、内面の調整は不明。被熱して赤変している。底径6.3cm。19と20は平底。どちらも体部外面はハケメ調整、底部外面はナデ調整、内面はナデ調整。19は底部との粘土継ぎ目から剥離している。復元底径は19が6.9cm、20が9.4cm。

21は小型の甕、あるいは壺である。溝底近くから、体部上半と口縁部を欠く状態で出土した。体部外面上半はタタキ、下半はヘラ状工具によるナデ調整。体部内面はハケメ調整、底部から体部にかけてはヘラ状工具によるナデ調整。

22・23は支脚の端部片。22の外面は磨滅著しく調整不明、端部はヨコナデ、内面はナデ調整する。復元口径8.6cm。23は外面にハケメが残る。端部をヨコナデ、内面をナデ調整する。復元口径8.8cm。

土師器 (24~30) 24・25は坏。24の口縁部はヨコナデ、体部外面は上半がヨコナデ、下半が手持ちヘラ削り。部分的にミガキがみられる。内面はハケメ調整で、部分的にミガキ調整。復元口径13.0cm。25は口縁部から体部外面上半はヨコナデ、下半はハケメ調整、底部外面はハケメ後ナデ調整。体部内面はハケメ後工具によるナデ調整。復元口径14.0cm。

26は畿内系高坏の坏底部片。内外面とも磨滅して調整不明。

27は口縁部が直線的に外方に開く畿内系広口壺の口縁部片。内外面ともヨコナデ。復元口径19.0cm。

28~30は甕の口縁部片。28は大きく外反し、端部を丸く仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面は屈曲部からヘラ削り。29は端部を内側に積み上げるように仕上げる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面は屈曲部のやや下からヘラ削り。30は内湾気味につくる。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面は屈曲部やや下からヘラ削り。口縁部外面が被熱している。

14号溝 (第3図)

調査区東部、傾斜面に位置する南北溝。水田跡の土壌化層下層の明灰色砂質土を除去後に検出した。13号溝の西に位置し、途中途切れるがほぼ13号溝と平行する。幅0.3~0.5m、深さ0.1前後を測る。

埋土は明灰色砂質土。少量の土器片が出土している。

出土土器 (第31図)

弥生土器 (14) 上げ底の甕の底部片。体部外面は粗いハケメ後ヨコナデ、底部外面はナデ調整。粘土接合面で剥離しているため、内面の調整は不明。復元底径5.8cm。

15号溝 (第3図)

調査区東部、13号溝と14号溝の間に位置する南北溝。14号溝と同様の状況で検出した。長さ10.5m、幅0.3m、深さ5cmを測る。

埋土は明灰色砂質土で、少量の土器片が出土している。

出土土器 (第31図)

弥生土器 (32・33) 32は複合口縁壺の口縁部片。外面は大部分が磨滅しているが、わずかにハケメが残る。内面はヨコナデ。復元口径18.0cm。

33は壺の底部片。平底であろう。外面は磨滅のため、ハケメの痕跡が残る程度である。内面はナデ調整。復元底径9.0cm。

16号溝 (第3図)

調査区東部、14号溝の西に位置する南北溝。14・15号溝と同様の状況で検出した。幅0.2m前後、深さ6cmを測る。

埋土は明灰色砂質土で、出土遺物はない。

竪穴状遺構

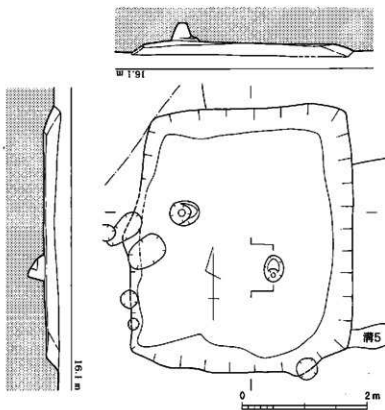
(図版8、第32図)

調査区北東部に位置する。1号住居跡より新しい。調査着手当初はテニスコートの側溝が存在したため遺構の南半しか検出できず、浅いくぼみに土砂と土器が堆積した状態かと考えていた。側溝撤去後平面形の確認を行い、南北に長い隅丸長方形の平面形をもつことがわかった。床面にピットを検出したため住居跡の可能性も考えたが、壁の立ち上がり非常に緩いこと、ピットの配置に規則性が見られないこと、床面にピット以外の施設が検出できないことから、住居跡と判断するに至らなかった。北壁3.1m、南壁3.5m、東壁と西壁4.0mを測り、深さは0.2mである。

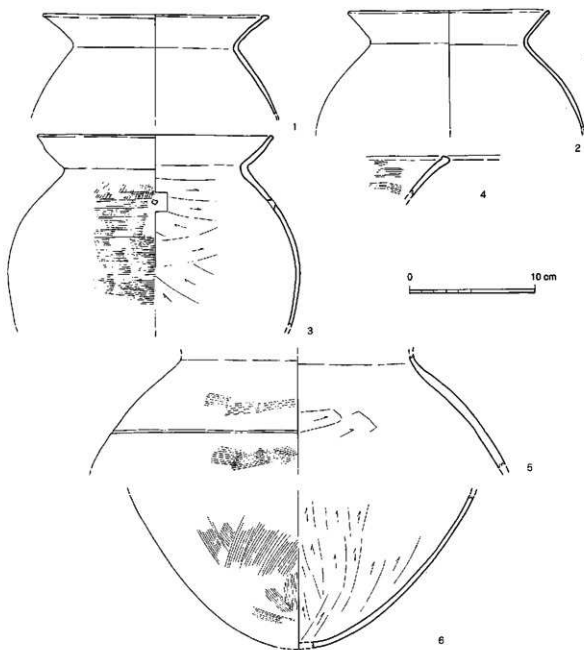
埋土は、上層から黒褐色粘質土、灰褐色粘質土である。土師器片が比較的多く出土したが、大部分は磨滅した小片であった。

出土土器 (図版14、第33図)

土師器 (1~6) いずれも壺。1は口縁端部を内側に摘み上げるように成形するが、磨滅著しいため若干変形している。調整は不明。復元口径17.8cm。2は口縁端部が丸くなっているが、これも磨滅著しく、変形していると思われる。調整不明。復元口径15.8cm。



第32図 竪穴状遺構実測図 (1/60)



第33圖 窠穴状辺構造土器実測図 (1/3)

3は口縁端部を角張って仕上げ、口縁部が内湾する。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はヨコ方向のハケメ調整、屈曲部下付近のみヨコ後タテ方向にハケメ調整。体部内面は屈曲部やや下からヘラ削り。体部上半に、焼成後に外面から開けられた径5mmほどの小さな孔があるが、意図的な穿孔というよりは偶然開いたものであろうか。復元口径18.6cm。

4は口縁端部を内側に擠み上げるように成形する。外面はヨコナデ、内面はハケメ調整。

5は体部外面上半に1状の沈線が巡る。外面ハケメ調整、内面はヘラ削り。

6は全体に磨滅気味で調整が不明瞭だが、外面をハケメ調整、内面をヘラ削りしているのがわかる。



第34図 水田畦表圖 (1/200)・断面模式圖 (水平方向1/200, 垂直方向1/20)

水田跡 (図版1・2、第35・37図)

調査区西半部、標高約15.2mの、谷状湿地に位置する。畦畔の残存状況が比較的良好で、検出した区画は全部で16枚、周囲を完全に検出できているのは8枚である。東西(畦畔2から畦畔19まで)約35mの範囲に営まれている。(上層水田跡)

遺物の出土は東側ほど出土量が多く、畦畔5付近ではほとんど認められない。田1・2の東半および田3・13から多くの弥生土器、土師器が出土した。微高地上からの流れ込みで、祭祀に用いられたと思われる土器、その他の遺物は出土していない。また、木製品も出土していない。

本調査区対岸上の弥生時代前期集落(大的遺跡1次調査区)、本調査区の弥生時代中期遺構の存在から、下層に弥生時代の水田が存在するのではないかと、との期待がもたれた。しかし、畦畔1と直交する高さ2~5cmほどの高まりとピットを検出したにとどまり、畦畔など明確に水田跡と認められるような施設は検出できなかった。

しかし分析の結果、稲作を行っていたとしてよい密度のプラントオパールを確認し、継続的に稲作が行われていたと判断された。おそらく、長期間に渡り稲作を繰り返した結果、上層の水田を耕作する際に下層の水田跡を破壊するかたちになったのであろう。(下層水田跡)

出土遺物は上層水田跡同様、畦畔2付近が最も多く、弥生土器、土師器、石庖丁(第40図2・3)が出土した。やはり、祭祀行為の形跡はなく、木製品も出土しなかった。

説明の都合上、上層水田跡、下層水田跡と表現するが、プラントオパール分析の結果と遺構の状況から長期間継続的に水田経営が行われたと考えられ、2時期の水田跡が存在するのではないことを注意しておく。

調査方法

まず、2次調査区の西壁と南壁に沿ってトレンチを設定し、土層の確認を行った。土層の観察からは下層水田跡の存在を確認できなかったが、可能性は否定できないため、上層から順次除去していくことにした。記録を取りやすいように、水田区画と畦畔にそれぞれ番号をふり、調査を進めた。

淡黄灰緑色粘質土を移植こてで除去し、埋没前の水田面を検出した。

覆土である淡黄灰緑色粘質土も、耕作土である暗褐色粘質土も、ともに水分量が多く粘性が高かったため、正確に土を分離できずに若干掘りすぎている。また、実際以上に耕作面に凹凸が生じる結果となり、足跡や稲株痕の検出がしにくい状況となった。しかしながら、足跡、稲株痕と認められる痕跡はなかった。

ある程度耕作面の検出が進んだところで、プラントオパール分析のためのサンプルを採取した。年度末の調査中断時期に分析結果を得、下層でも稲作が行われていたことが判明した。分析結果に



上層水田跡覆土除去作業

については、後項で詳述する。

ここで調査区を拡張して調査を続行した。耕作面を完全に検出したところで平板実測により平面図を作成後、空中写真を撮影した。

続いて、移植こてを用い暗褐色粘質土の除去を行った。畦畔は土層観察のため区画内を掘り下げた後に除去し、一部は最後まで残した。ここで、下層水田跡と想定される淡灰色粘質土の面が検出されたのだが、上層を除去したことで湧水が激しくなり、一部掘削を断念した。確実に水田跡と判断できる遺構は検出できなかつた。土層観察のため数箇所にとレンチを設定し、土層図と平面図の作成を行った。

土層 (第35・37図)

まず、水田跡を覆うのは淡黄灰緑色粘質土である。厳密に言うと淡黄褐色粘質土と淡灰色粘質土がマール状に混じりあった状態で、その下に淡灰緑色粘質土が数mmから1cmの厚さで堆積している。(第35図では表現しにくいので一層として図化している。) 砂層は全く認められない。

畦畔の上には堆積せず、畦畔に囲まれた範囲内にその堆積範囲は限られる。ただし畦畔19の南半に限っては暗褐色粘質土の上にも堆積するが、堆積の範囲は暗褐色粘質土の範囲に限定される。また、畦畔20・21は淡黄灰緑色粘質土に埋没していた。

これらの状況から、洪水によって一気に埋まったのではなく、何らかの理由で水田跡が廃棄された後自然に埋没したのではないかと考えている。あるいは、洪水の被害を受けた範囲の緑辺付近にあたり、砂でなく泥土が堆積し、水が引くのにかかった時間がかかったのかもしれない。いずれにせよ、埋没に比較的長い時間がかかったと見ている。耕作面に足跡、耕作具痕などの活動の痕跡が検出できなかったことも、このことの裏づけとなろう。

上層水田耕作面および畦畔を形成するのは暗褐色粘質土である。水田耕作に伴って土壌化し、土色が黒っぽく変化したもので、水田耕作にあたり持ち込まれた客土ではない。上面に攪拌による巻き上げは認められない。耕作を中止してから埋没するまでに時間を要したことの反映であろう。



田1東トレンチ土層



田1西トレンチ土層



- (○) 凝灰層上
 (⊙) 凝灰層 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
- (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)
 (○) 凝灰層上 (礫石層)



第35圖 水田跡州トレンチ兩壁土層次圖 (1/60)

暗褐色粘質土の下には淡灰褐色粘質土、ないし明灰色粘質土が、さらに下層に暗灰色粘質土、淡灰色粘質土が堆積している。下層水田跡を形成する層である。どの層も酸化鉄を含んでいるが、酸化鉄の分布は同一層中でも偏りが見られた。

田1東トレンチでは、暗褐色粘質土の下に黄灰色砂質土を確認した。現在の床土に似ているが、田1西トレンチ、南トレンチでは認められないため、ごく限られた範囲に形成されたと思われる。

いわゆる地山に相当するのは黄灰色砂質土で、微高地上の遺構はすべてこの層に切り込んでいる。この黄灰色砂質土は青灰色あるいは灰色粘質土の上に堆積している。青灰色、灰色粘質土は地下水の影響でグライ化したもので、本来は南トレンチ西端付近に見られるように茶褐色ないし黄灰褐色をしていた。灰色粘質土の下は褐色砂層である。

南トレンチで2箇所、西トレンチで2箇所、填砂の痕跡を確認した。西トレンチの1箇所は淡黄灰緑色粘質土の直下で止まっていたが、他の3箇所は全て淡黄灰緑色粘質土を突き抜けている。この填砂は筑紫大地震（678年）の際に生じたものと考えられ、地震が起きたときには既に上層水田跡は埋没していたことになる。

本水田跡耕作時の様子については、土層の状況からある程度のことが推測できる。しかしながら、耕作による土壌化や地下水の影響等、耕作後の土壌変化を考慮しなければならない。この点については、調査者の認識不足ゆえに土層観察の際に注意が足りず、土層から得られる情報が乏しくなっていることを反省している。

さて、本水田跡にあつては、①炭酸鉄結核が検出されない、②踏み層がごく一部を除いて形成されない、③グライ化層が田面下25～30cmに見られる、④植物遺体が検出されない、以上のことが指摘できる。少なくとも地下水によって水田面を常に湛水できる状況ではなかったといえるだろう。

畦畔

まず、水田跡の最も東に位置する南北方向の畦畔2により住居跡群と区画される。幅は0.4～0.6mほどである。しかし、土層観察によれば畦畔2は畦畔ではなく、先述した土壌化層の広がりである。

水田跡の西は畦畔19により区画されるが、調査区南壁付近ではだらりと広がり、畦畔とは呼びにくい状況を呈している。北半の残存状況は良好なことから、埋没の過程で崩壊したと思われる。幅は0.5～2.0mと一定していない。

調査区北壁近くに東西方向の幅1.5～2.0mの畦畔（畦畔1）が通る。これらの畦畔に囲まれた内部は、幅0.3～0.5mの畦畔によって更に区画されている。畦畔によって区切られる一区画の広さ



プラントオーバーサンプル採取状況



第36図 水田跡下層実測図 (1/200)



図13 東トレンチ

- 部1 (西) トレンチ
 ①暗灰色粘土(硬、上層部)
 ②黄灰色砂質土
 ③暗灰色粘質土
 (粘性の強弱多く含む、中層部)
 ④暗灰色粘質土
 ⑤黄灰色砂質土
 ⑥灰白色砂質土(中層部)

- 部1 (西) トレンチ
 ①暗灰色粘土(硬、上層部)
 ②暗灰色粘質土(硬、上層部)
 (小礫多量、真砂の多量)
 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕
 (小礫多量、真砂の多量)
 ⑳暗灰色粘土(小礫多量、真砂の多量なし)
 ㉑暗灰色粘質土(小礫多量)
 ㉒暗灰色粘土(⑫より異なる)
 ㉓暗灰色粘土

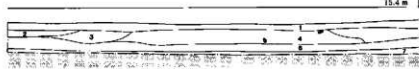


図14 西トレンチ



図14 東トレンチ

- 部14 トレンチ
 ①暗灰色粘土(上層部)→
 部1 (西) トレンチ①層
 ②暗灰色粘質土→
 部1 (西) トレンチ②層
 ③灰褐色土
 ④暗灰色粘土

- ⑤土中のまじり
 ⑥暗灰色粘質土→
 部1 (西) トレンチ③層
 ⑦暗灰色粘土
 ⑧暗灰色粘質土(中層部)→
 部1 (西) トレンチ④層

0 2m

第37図 水田跡下層トレンチ土層実測図(1/40)

はまちまちで、狭いものは45~50㎡、広いものは110㎡以上になる。

畦畔の高さは5cm程度で決して高くはない。耕作面とほとんど同じ高さの部分もあり、本来の高さは失われている。畦畔の規模、位置に関わらず、杭列・矢板列、心材など補強の痕跡は全く認められない。畦畔に沿う溝もまた認められなかった。

畦畔18と畦畔2が交差する位置にビットが掘られている(P-45)。土器等の遺物は出土しなかった。性格は不明。埋土は淡黄灰緑色粘質土である。

耕作土と、畦畔を構成する土とは区別が全くつかない状況であった。これは、盛土あるいは切り土によって畦畔をつくり、その後耕作土を用いて補修を繰り返した結果と考えられる。

畦畔1は単なる区画だけでなく、その幅から道路としての機能も担っていたものと推測される。先述したとおり補強の痕跡は認められない。調査中は、地下水位が高い上に現地表との比高差が1.6mもあり水はけが悪かったにもかかわらず、畦畔1は作業員が安全に通行できる強度を保っていた。当時は、調査時よりも乾燥した環境と推測され、補強を行わずとも通行は可能であったのだろう。

畦畔の方向は座標軸とほぼ合致する。水繩山地北麓は条里が良く残る地域として有名な地域であり、水田跡検出当初は条里水田ではないか、と考えたりもした。しかし、等高線がほぼ座標軸の南北方向と合うため、地形に素直に沿った結果とみている。

灌漑施設

先述した通り、畦畔によって区切られる区画の広きはまちまちである。これは、東から西へ傾斜し

ている地形上、各区画に水が掛かるようにするために、弥生時代から古墳時代にかけての水田に多く見られる形態である。明確な水口は検出できなかったため、田越しに水を掛けたとと思われる。

しかし、水口は検出できなかっただけで存在していた可能性は残る。畦畔8の北半が淡黄灰緑色粘質土を除去後に姿を現したことや、畦畔上と耕作面のレベルがほとんど変わらない地点があることなどから、いずれの畦畔も埋没の過程で本来の高さを失っていると考えられる。一部の畦畔をやや低くつくり水口としていたとしても、現況では検出できない。畦畔が交差する部分を直行させず短い北西—南東方向の畔をはさむ箇所があるが、存在したとすればこの部分の水口であったのではないだろうか。

遺跡の概要で述べたが、水田跡の西側は本来緩やかな傾斜面であるが、掘削の過程で溝等の遺構は見つからず、現況でも検出できなかった。東側に13号溝があり、灌漑はこの溝を利用して東側から行われたと思われる。しかし、13号溝から水田への導水施設や堰などは、本調査区内では検出できなかった。

13号溝は、水田跡の土壌化層（暗褐色粘質土）と淡黄灰緑色粘質土がその埋土上に堆積している。このことから、機能したのは下層水田跡の時期であったように思われるが、土壌化は土中の有機物の影響で起き、水田廃棄後も土壌化がある程度周囲に及ぶ。その結果、溝埋土上面に暗褐色粘質土がみられると考えている。溝底近くから弥生時代終末期の甕が出土しており、少なくともこの時期は溝として機能していたと考えられる。出土遺物に古墳時代前期の土器が含まれ、この時期には埋没したものと思われる。

1号溝もまた、水田跡の東側に位置する南北溝で、上層水田跡に伴う水路のように見える。しかし、古墳時代中期の4号竪穴住居跡を切っており、掘削時期が古墳時代中期以降ということになる。水田耕作が継続的に行われていたならば、13号溝埋没後直ちに掘削されたはずで、1号溝は時期があわない。ここでは13号溝のみが、水田跡に伴う水路であったと考えておく。

さて、排水はどうしていたかとの疑問が残る。13号溝は耕作面よりも高い位置にあり、排水溝を兼ねるのは不可能である。土層の項で述べたように、地下水位が比較的高い位置にあるものの、地下水で常に水田面を湛水できる状況にはなかつたと思われる。落水期には地下水位も下がり、水の供給を停止することで落水出来たのではなからうか。このため、排水に関する施設は必要なかつたのではないかと考える。

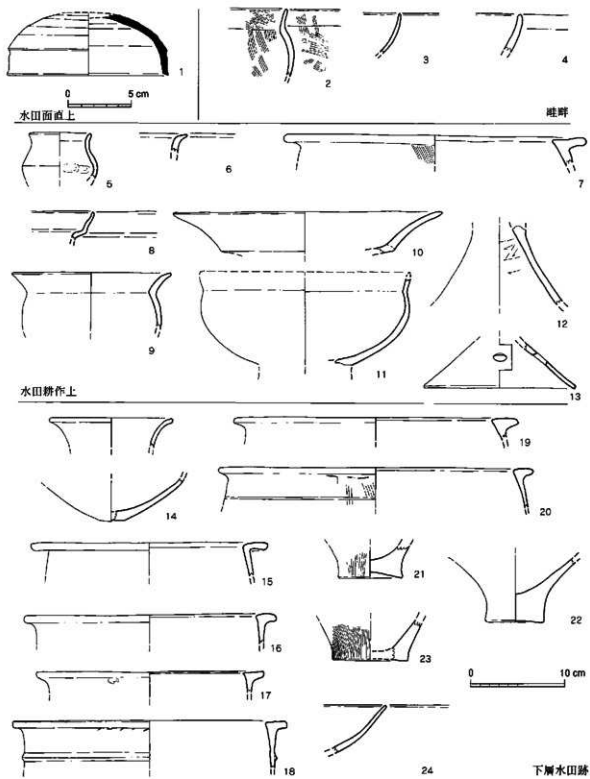
調査中の状況からすると、地下水位が高く排水に苦労したのではないかとの印象があるが、本遺跡周辺の現状に起因するもので、耕作当時は比較的乾燥していたと考えられる。畦畔1が通路として機能できるだけの幅をもちながら補強が一切行われていないこと、比較的乾燥した地域に生育するタケ畑科、ススキ属のプラントオパールが検出されたことが、その裏づけとなろう。

谷状湿地の地下水位が高い部分に水田が営まれ、水位が不足する場合のみ水路から水が供給された、というのが実際のも姿ではなかつただろうか。

時期

元来、水田跡は出土遺物が少なく、時期の決定が大変に難しい。本遺跡でも出土遺物は流れ込みで、直接時期を示す遺物は出土していない。しかし、周囲の遺構との関連から時期を推測することができる。

土層の項で述べたように、筑紫大地震が発生したときには、上層水田跡は完全に埋没していた。水田面検出時に須恵器坏蓋が、調査中には畦畔1の直上から須恵器小片が出土している。用水路と思われる13号溝は弥生時代終末期には機能していたが、古墳時代前期には埋没している。



第38図 水田跡出土土器実測図 (1・3・4・8~13・24は1/3, 他は1/4)

以上のことから、水田跡は古墳時代前期のうちに耕作が中止され、中期には埋没が始まっていたと思われる。

下層水田跡の時期を特定できる遺物もまた出土していないため、稲作開始期を特定するのは難しい。用水路が弥生時代終末期には機能していたから、少なくともこの時期には水田経営は行われていた。継続的に稲作が行われていたと思われること、当該期の竪穴住居跡等の遺構が見当たらないことから、1号竪穴住居跡の弥生時代後期まで遡る可能性が高いと考える。

出土土器 (図版15、第38回)

水田面直上

須恵器 (1) 坏蓋の1/2ほどの破片。口縁端部は窪ませ、体部外面に後がめぐる。天井部外面は回転ヘラ削り、口縁部内外面、天井部内面はヨコナテ調整。焼成は堅緻。復元口径12.6cm。

畦畔

弥生土器 (2) 小型の壺の小片。内外面ともハケメ調整。畦畔2 (暗褐色粘質土) から出土した。土師器 (3・4) 坏の口縁部の小片。3は薄手で、摩滅著しく調整不明。4はやや厚めにつくり、外面は摩滅しているが、内面はナテ調整。どちらも畦畔2 (暗褐色粘質土) から出土した。

水田耕作土 (暗褐色粘質土)

弥生土器 (5~7) 5は小型の壺。口縁部は内外面ともヨコナテ。体部外面は摩滅著しく調整不明。体部内面はナテ調整で、ナテ痕が残る。復元口径6.6cm。田3から出土した。

6・7は甕の口縁部片。6は如意形口縁で、摩滅著しく調整不明。田13から出土した。7は端部を丸く仕上げる逆L字状口縁。口縁部はヨコナテ、体部外面はハケメ調整、体部内面はナテ調整。復元口径31.0cm。田1 (東) から出土した。

土師器 (8~13) 8は山陰系の二重口縁をもつ小型の壺。外面は摩滅著しく調整不明、内面はヨコナテ。田1 (東) から出土した。9は小型丸底壺。全面摩滅著しく調整不明。復元口径12.5cm。同じく田1 (東) から出土。

10~12は高坏。10は在地系高坏の坏部片で、坏部が浅い。摩滅著しく調整不明。復元口径21.6cm。田10から出土。11は坏部の口縁が屈曲するタイプで、口縁端部を欠く。摩滅著しく調整不明。田3から出土。12は高坏の脚部片。外面は摩滅して調整不明だが、内面はヘラ削りする。坏部との接合面ではかかれている。田1 (西) から出土した。

13は器台の脚部片。薄手で摩滅著しく調整不明。1ヶ所穿孔する。復元底径12.0cm。田13から出土した。

下層水田跡 (淡灰色土)

弥生土器 (14~23) いずれも田1 (東) から田3にかけての範囲から出土した。

14は小型の壺の口縁部と底部片である。摩滅著しく調整不明だが、土質、焼成がよく似ており同一個体と思われる。復元口径13.0cm、底径2.6cm。

15~20は甕の口縁部片、21~23は底部片である。

15の形状は逆L字状だが、如意形口縁が変化したものである。摩滅著しく調整不明。復元口径25.0cm。

16は端部を丸く仕上げる、短い逆L字状口縁。摩滅著しく調整不明。復元口径26.6cm。

17・18は端部をやや角張って仕上げる逆L字状口縁。どちらも口縁部を内側に突出気味につく

る。17は摩滅著しく調整不明だが、口縁部直下に指頭痕がみとめられる。復元口径24.0cm。18は断面三角形突帯を貼付する。摩滅して調整不明だが、口縁直下に工具痕が残る。復元口径29.0cm。

19・20は口縁端部を丸く仕上げ、口縁部が内傾する。19の外表面はヨコナデ、内表面は摩滅して調整不明。復元口径30.0cm。20は口縁部下に1条沈線をめぐらす。口縁部外表面はヨコナデ、体部外表面はハケメ調整。内表面は摩滅著しく調整不明。復元口径33.2cm。

21は上げ底で、体部外表面はハケメ調整、底部外表面はナデ調整。内表面は摩滅著しく調整不明。底径6.8cm。22はわずかに上げ底。内外表面とも摩滅著しく調整不明。底部に黒斑がある。底径6.3cm。

23は平底。体部外表面はハケメ調整、底部外表面はナデ調整、内表面はナデ調整。復元底径8.0cm。

土師器 (24) 椀形の坏部をもつ高坏の口縁部片。外表面は摩滅著しく調整不明。内表面はヨコナデ。

その他の遺構・遺物

ここではピット出土土器、遺構検出時に出土した土器と石製品、土製品について報告する。

出土土器 (図版15、第39図)

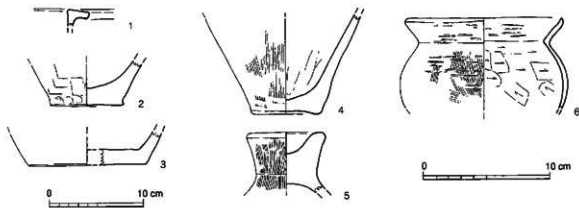
弥生土器 (1~5) 1~4は甕。1は逆L字状口縁の小片。磨滅著しく調整不明。

2・3は平底の底部片。2は体部外表面が磨滅しているが、ハケメのあたり痕と指頭痕が残る。底部外表面、内表面はナデ調整。底径7.8cm。3は樽型の胴部をもつであろう。内外表面ともナデ調整。復元底径12.0cm。

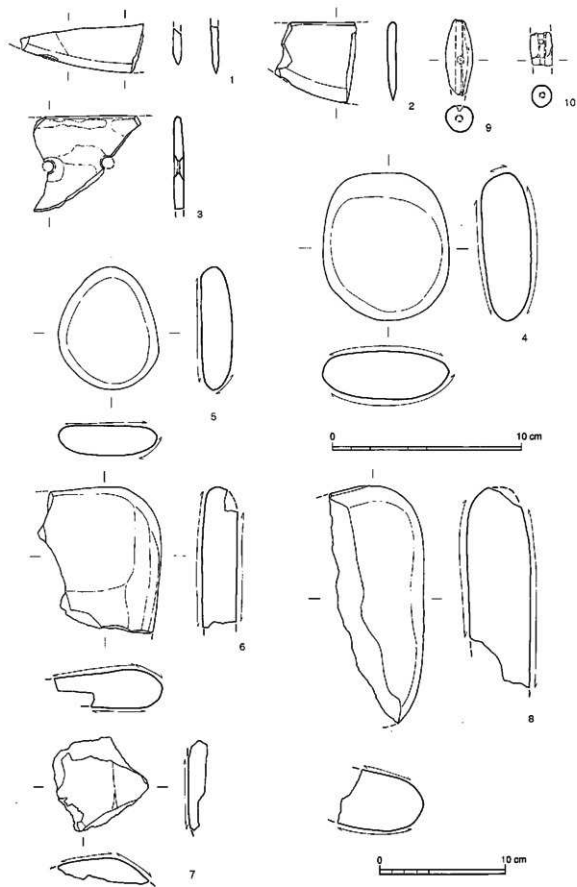
4はわずかに上げ底。体部外表面はハケメ調整、底部外表面はナデ調整、内表面は強いユビナデで、なで上げた痕が残る。底径7.1cm。

5は蓋のつまみ部分。外表面はハケメ調整、つまみ部分はナデ調整、内表面もナデ調整。つまみ部分径8.0cm。

土師器 (6) 小型丸底壺。口縁部は内外表面とも、磨滅して不明瞭だが雑なミガキ調整。体部外表面はハケメ後雑なミガキ調整、内表面はヘラ削りする。口縁部から体部にかけて被熱のため黒変している。復元口径12.4cm。



第39図 その他の遺構出土土器実測図 (6は1/3, 他は1/4)



第40图 石製品・土製品実測図 (1~5・9・10は1/1, 他は1/3)

石製品 (図版、第40図)

石製丁 (1~3) 1は5号土坑から、2と3は水田跡淡灰色土中から出土した。いずれも研磨が十分でなく、部分的に敲打痕が残る。石材の厚みが足りない部分が磨き残されたものであろう。

1は表面の研磨が粗く、裏面に一部敲打痕が残る。刃部が欠けた後に研ぎ直している。2は裏面全体に敲打痕が残るが、刃部の研ぎ出しが行われているため製品である。3は表面の一部に敲打痕が残り、裏面は研磨しているが粗い。穿孔が2箇所確認でき、孔径は0.7cmに復元できる。

磨り石 (4・5) 4は5号住居跡北東隅から出土した。表裏面と側面の一部が磨れている。長さ7.8cm、幅6.7cm、最大厚2.5cm、重さ222g。

5は水田跡淡灰色土中から出土した。表面と側面の一部がよく磨れている。裏面は自然面。長さ6.45cm、幅5.3cm、最大厚1.6cm、重さ79g。

砥石 (6~8) 6は6号住居跡から出土した。裏面の一部が欠けるが、表裏面ともよく磨れている。残存長11.65cm、残存幅9.8cm、最大厚3.05cm、重さ434g。

7・8は水田跡淡灰色土中から出土した。7は欠けてごく一部しか残らないが、大変よく磨れている。残存長7.25cm、残存幅7.4cm、重さ110g。8も半分ほどかけている。表裏面とも使用しているが、側面の一部が最もよく磨れている。残存長18.9cm、残存幅7.4cm、最大厚5.0cm、重さ898g。

土製品 (図版、第40図)

土鉢 (9・10) 9は遺構検出時に出土した。先端部分を欠く。表面に1ヶ所、径0.35cmの穿孔がみられる。深さ0.3cm程度で貫通していない。欠けている側が被熱したのか、赤変している。残存長4.0cm、最大径1.45cm、孔径0.4cm、重さ6g。

10は水田跡暗褐色粘質土中から出土した。その大部分を欠き、1.8cmほどしか残らない。最大径1.1cm、孔径0.25cm、重さ1g。

Ⅲ 自然科学分析

1. 大的遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴からおおむね属レベルの同定が可能である。また、木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、古墳時代の住居跡から出土した11点の炭化材である。

3. 方法

炭化材を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 大的遺跡における樹種同定結果

試料	結果（和名/学名）	
No. 1	広葉樹	broad-leaved tree
No. 2	クスノキ科	Lauraceae
No. 3	コナラ属クスギ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
No. 4	サクラ属	<i>Prunus</i>
No. 5	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
No. 6	ヤナギ属	<i>Salix</i>
No. 7	コナラ属コナラ節	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
No. 8	サクラ属	<i>Prunus</i>
No. 9	モチノキ属	<i>Ilex</i>
No.10	ヤナギ属	<i>Salix</i>
No.11	ヤナギ属	<i>Salix</i>

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

写真1

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。
放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。
接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四

国、九州に分布する。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

写真2・3

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmくらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属クスギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

写真4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クスギ節に同定される。コナラ属クスギ節にはクスギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

クスノキ科 *Lauraceae*

横断面：中型から小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外は不明瞭な点が多いことから、クスノキ科の同定にとどめた。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ、シロダモ属以外のクスノキ科の樹種と思われる。

サクラ属 *Prunus* バラ科

写真5

横断面：小環で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。接線

断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

モチノキ属 *Ilex* モチノキ科

写真6

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞のみからなる単列のものと、2～6細胞幅で上下の縁辺部の1～3細胞高が単列の多列のものからなる。

以上の形質よりモチノキ属に同定される。モチノキ属は、常緑または落葉性の高木または低木で、モチノキ、クロガネモチ、イヌツゲなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。このうち、モチノキは常緑高木で高さ15m、径50cmに達する。やや堅硬な材で、旋作、器具、彫刻などに用いられる。

広葉樹 *broad-leaved tree*

横断面：道管が存在する。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお、本試料は小片で保存状態が悪く、広範囲の観察が困難なことから、広葉樹の同定にとどめた。

5. 所見

分析の結果、古墳時代の住居跡から出土した炭化材の樹種は、ヤナギ属3点、コナラ属コナラ節2点、コナラ属クスギ節1点、クスノキ科1点、サクラ属2点、モチノキ属1点、広葉樹1点と同定された。

ヤナギ属は、温帯に広く分布し、水辺や湿地に生育する。コナラ属コナラ節は、主に温帯上部の冷温帯、コナラ属クスギ節は温帯下部の暖温帯に分布する落葉広葉樹で、水はけのよい乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。サクラ属は、温帯の山地や丘陵の斜面に生育する落葉樹で種類も多い。クスノキ科およびモチノキ属は温帯下部の温暖な暖温帯に分布し、照葉樹林の主要構成要素である。これらの樹木は、本遺跡の周辺地域に普通に分布していたと推定される。

文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.
島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.

大的遺跡の炭化材 I



横断面 ————— : 0.2mm

1. No.6 ヤナギ属



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm

2. No.5 コナラ属コナラ節



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm

3. No.7 コナラ属コナラ節

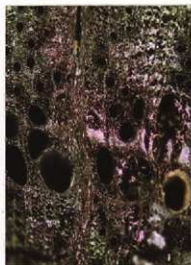


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.4mm

大的遺跡の炭化材 II



横断面 : 0.4mm
4. No.3 コナラ属クスギ節



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm
5. No.4 サクラ属



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm
6. No.9 モチノキ属



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.4mm

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (杉山, 2000)。

2. 試料

試料は、調査区西壁から採取された計21点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、現時点では土層名は設定されておらず、各層の時期も不明である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10-5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科は0.48である。

4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 調査区西壁

試料1から試料19までの層について分析を行った。その結果、試料1～試料18の各試料からイネが検出された。このうち、水田遺構が検出された暗褐色土層（試料12、13）およびその下位層（試料14～16）では、密度が9,700～15,800個/gとかなり高い値であり、上位の試料1～試料10でも密度が5,300～11,200個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

最下位の褐色土層（試料18）では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が遅かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 調査区西壁畦畔部

水田遺構が検出された暗褐色土層（試料21）およびその直上層（試料20）について分析を行った。その結果、前者では密度が23,300個/g、後者でも10,500個/gとかなり高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、スキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、各層からスキ属型やタケ亜科が検出され、下位層を中心にヨシ属も検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、最下層を除く各層ではイネが卓越していることが分かる。

以上のことから、当時は集約的な水田耕作が継続して行われていたと考えられ、遺跡周辺にはスキ属などが生育する草原的なところや、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された暗褐色土層からは、イネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、その下位層をはじめ、上位の各層でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

当時は集約的な水田耕作が継続して行われていたと考えられ、遺跡周辺にはスキ属などが生育する草原的なところや、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

文献

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社、p.189-213。

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―。考古学と自然科学、9、p.15-29。

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―。考古学と自然科学、17、p.73-85。

表1 福岡県、大分の遺跡におけるプラント・オパール分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	調査区西壁										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	53	68	60	75	60	83	68	105	112	60	37
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		8			7		23				7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	8	8	15	7	7	15	30	38	30	45	45
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	45	38	15	52	52	23		23	7	15	37

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.55	1.99	1.76	2.20	1.76	2.43	1.99	3.09	3.29	1.77	1.10
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		0.48			0.47		1.42				0.47
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.09	0.09	0.19	0.09	0.09	0.19	0.37	0.47	0.37	0.56	0.56
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.22	0.18	0.07	0.25	0.25	0.11		0.11	0.04	0.07	0.18

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

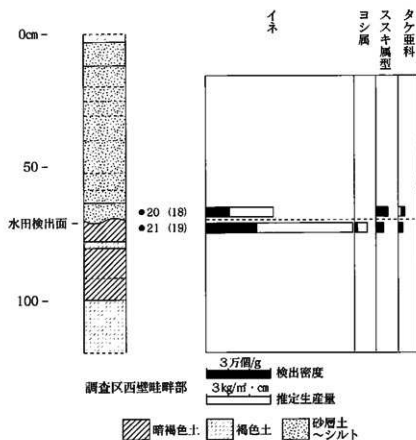
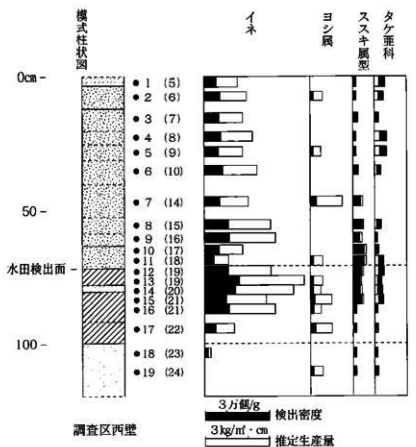
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	調査区西壁										
		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	105	158	142	97	112	45	7			105	233
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		8	7	15	7	15	8				8
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	37	23	30	37	7	7	7	8	52	23	23
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	15	23	37	15	37	67	22	98	30	15	15

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	3.08	4.65	4.19	2.85	3.30	1.32	0.22			3.08	6.86
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		0.47	0.47	0.94	0.47	0.94		0.47			0.48
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.46	0.28	0.37	0.46	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.65	0.28
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.07	0.11	0.18	0.07	0.18	0.32	0.11	0.47	0.14	0.14	0.07

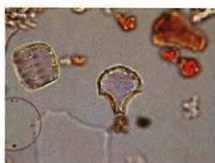
※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



第1図 大的遺跡におけるプラント・オパール分析結果
(() 内数字は9頁第4図土層番号 執筆者追加)



イネ
試料 1



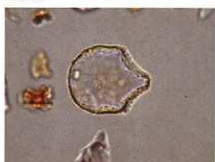
イネ
試料 8



イネ
試料 15



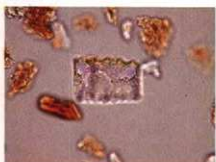
イネ (側面)
試料 7



ヨシ属
試料 15



ススキ属型
試料 9



ネザサ節型
試料 4



クマザサ属型
試料 5



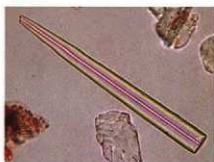
ミヤコザサ節型
試料 19



カヤツリグサ科
試料 12



樹木起源
試料 11



海綿骨針
試料 1

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μ m

第4章 終わりに

I 大的遺跡の変遷について

本遺跡周辺は筑後川沿岸の微高地と後背湿地が複雑に入り組んでいる。本遺跡は土器の散布地として知られていた常盤遺跡に近く、また、田主丸中学校遺跡、水分遺跡など近隣に集落遺跡が存在するが、現地地形ではこれらの遺跡よりも標高が低く湿地と思われた。しかしながら、大的遺跡1次調査の結果と合わせ、標高16m前後の微高地と谷状の湿地が南北に手指状に伸びる地形であること、微高地上に集落跡が存在すること、湿地に水田を営んだことが判明した。(今年度、大的遺跡2次調査区の東105m地点の調査が実施され(玉田遺跡)、谷状湿地にあたることがわかっている。)

集落の中心は調査区の東側に展開するため全体の様相は知り得ないが、周囲の遺跡の様相と合わせて、時代をおって状況を整理したいと思う。

まず、本遺跡で最も古い遺構は弥生時代中期前半のもので、1・2、5～8号土坑が相当する。水田跡がある湿地を挟んだ対岸の大的遺跡1次調査区では、弥生時代前期の竪穴住居跡が確認されているが、本遺跡内では前期の遺構は確認できなかった。水分遺跡で弥生時代中期の竪穴住居跡が確認されており、本遺跡との関係が注目される。

竪の口縁部片が土坑、溝、水田跡(流れ込み)から多く出土しているが、三角口縁ないし、三角口縁から変化した逆し字状口縁がほとんどで、如意形口縁は13号溝から出土した1点(第31図5)のみであることにも注意しておきたい。

弥生時代後期の遺構として、1号竪穴住居跡、2号溝があげられる。2号溝は直線的にのびるが、集落の境界を示しているのだろうか。そうであれば、1号住居跡が最も西に位置する住居跡で、集落の主体は調査区の東側になろう。1号住居跡は焼失住居で炭化材が多く遺存したため樹種の同定を行い、身近な木材を使用していたことを確認した。

弥生時代終末期の遺構として4号溝、13号溝があげられる。4号溝は2号竪穴住居跡に西端を破壊され、東は調査区外にのびるため、性格は不明である。13号溝は水田跡に伴う用水路と考えられ、少なくともこの時期には水田耕作を行っていたことになる。しかし、この時期に相当する竪穴住居跡や土坑が見当たらないため、耕作開始時期は1号竪穴住居跡の時期まで遡るのではないかと考えている。

次に確認できるのは古墳時代初頭で、6・7号竪穴住居跡、3・4号土坑、竪穴状遺構が相当する。7号竪穴住居跡は住居跡に確実に伴う出土土器がないが、中期の5号住居跡より古く、中期の土器を含まないため前期と判断した。弥生時代後期と同様、集落の主体は調査区の東側になる。

3・4号土坑は一つの高坏を打ち欠いて2基の土坑に埋納するという、特異な状況を示している。集落の縁辺に位置しており、祭祀的な意味合いをもつと思われる。この時期まで水田耕作を行っていたと考えているが、水田との関係性も考えられる。土器を用いる水田祭祀跡には、大溝脇やそれに近い水田面に破砕した土器が散在する場合や、大溝脇、水田脇微高地など水田が見渡せる場所に土器を据え置く場合がある。3・4号土坑の状況はどちらの場合とも異なるが、水田を見渡せる場所に位置し、あながち水田との関係性を否定できないように思うが、どうであろうか。

古墳時代中期の遺構として、2・5号竪穴住居跡、掘立柱建物、9号溝があげられる。2号住居跡は古墳時代中期中葉の住居跡で、これは「仁右衛門畑遺跡I」において重藤氏が行った土師器編

年の6期に相当する。5号住居跡は出土土器が少なく判断が難しいが、6期に含められるか。住居跡の平面形、主軸方向とも2号住居跡と近く、そう大きな時期差はないと思われる。ただ、2号住居跡も1次調査区2号住居跡もカマドは廃棄後放置されており、廃棄時の状況を留めている。一方、5号住居跡のカマドは詳細不明とはいえ、焼上が掻き出され土器が散乱していた点に気がかかる。

さて、「仁右衛門畑遺跡1」によれば、吉井町塚堂遺跡が5期に遡る可能性があるが、仁右衛門畑遺跡周辺では概ね6期にカマドが出現、定着したとされている。本遺跡1次調査区でも6期はカマドを付設する住居跡と付設しない住居跡が混在しており、本遺跡においても仁右衛門畑遺跡周辺と同様の傾向を示している。

本遺跡でカマドを敷設する6期の住居跡は2号住居跡と1次調査区2号住居跡の2軒のみである。この2軒を比較すると、住居跡の平面形や出土土器、カマドの支脚の位置等、1次調査区2号住居跡の方がより新しい要素をもっている。この状況で仁右衛門畑遺跡の住居跡との比較を行うのはかなり乱暴だが、気になる点を指摘したいと思う。

まず、仁右衛門畑遺跡では、住居跡の平面形に関係なくカマドはほぼ住居跡の中軸線上に位置するが、本遺跡では中軸線からずれた位置に付設する。ただし、2号住居跡は北から東にカマドを造り変えているが、北カマドは中軸線上に位置しており、造り変えの際に何らかの制約があったため、例外的であるかもしれない。ちなみに、鷹取五反田遺跡では住居跡の平面形とカマド付設位置との相関関係はとくに認められない。

次に、仁右衛門畑遺跡では焚き口を河原石で補強するカマドがあるが、本遺跡ではみられない。この点については仁右衛門畑遺跡でも全てのカマドに見られるわけではないので、本遺跡周辺でも調査事例の増加を待たねばならない。また、6～7世紀まで下がる日詰遺跡9・12号竪穴住居跡で袖石を確認しており、採用時期に差がある可能性もある。

最後に大型甕の出土が6期のカマドをもつ住居跡においては一般的であると指摘されているが、本遺跡では出土していないことである。本調査区では1号溝から把手片が出土したにとどまる。2号住居跡からは多穴式の甕底部片が出土しているが、器壁は薄く、孔径もかなり小さい。5号住居跡からは出土していないし、後期に属する4号住居跡から出土しているのは小型甕の底部に穿孔した甕である。1次調査区でも出土していない。

以上のことが、カマドが伝わったルートの違いを示しているのか、あるいは受容した集団の特性を示しているのか、非常に興味深い。今後の調査事例の増加をまって再度検討したい点である。

掘立柱建物、9号溝は出土遺物からは時期の判断ができず、埋土の状況から古墳時代中期としている。9号溝は大部分が調査区外になり、はっきりした性格は不明だが、集落の中心と思われる方から湿地に向かっており、排水が目的だったのであろうか。

この時期には既に水出は埋没を始めており、結果須恵器環蓋（第38図1）が水田面直上に流れ込むことになる。

4号竪穴住居跡は確実に住居跡に伴う出土土器がなく判断が難しいが、須恵器環蓋片が出土しているので、古墳時代後期に相当すると考えている。1号溝は4号竪穴住居跡より新しく、古墳時代後期以降の掘削だが、埋没時期は不明である。

7世紀末の筑紫大地震に見舞われる頃、集落は廃絶し、本遺跡は寂れていたようである。

II 水田跡について

本遺跡では図らずも水田跡を調査する機会に恵まれた。ここでは、県内で調査された水田跡の状況を概観し、本遺跡の水田跡についていさ少し触れることにしたい。

福岡県内で水田跡が確認された遺跡を表2にあげる。このほか、井堰、水路等水田に付随する施設のみが確認された遺跡、イネのプラントオパールは確認したが水田跡そのものは検出できなかった遺跡が数箇所ある。調査事例数はそもそもの発掘調査件数に左右されるため、当然のことながら福岡市が圧倒的に多い。本遺跡が位置する筑後地域については、水田跡の可能性の指摘にとどまる遺跡までも含めて表に掲載している。京薬地域で3例、筑豊地域では調査者の管見の範囲では事例が見当たらないことからすると、筑後地域の事例数は比較的多いといえるだろう。

本遺跡と同じ弥生時代後期から古墳時代前期に該当する水田跡が確認されているのは、福岡市那珂君休（那珂久平）遺跡、同拾六町平田遺跡、同野方久保遺跡、春日市須玖尾花町遺跡、同天田遺跡、同大坪遺跡、同上平田遺跡、築上郡大平村上唐原久保畑遺跡、同上唐原大法寺遺跡、下唐原石ヶ町遺跡である。

これらの遺跡は概ね、丘陵の裾部か沖積平野に立地しており、水田跡は後背湿地や谷部分など水を得やすい場所に営まれる。水田区画はほぼ方形、一区画の面積はまちまちで、用水路から水が引き入れられた後は畔越しに水が掛けられたと想定されている。那珂君休遺跡で排水施設が検出されているほかは、排水路は想定にとどまっている。本遺跡で確認した水田跡も同じ様相を呈しており、この時期の一般的な形態の水田であったと考えられる。

調査面積が限られていることもあり、水田跡のみ、あるいは水田跡と水利施設のみの調査がほとんどであるが、那珂君休遺跡は調査次数を重ねて広大な面積を調査し、水田跡の広がりか確認されている。しかし、残念ながら水田耕作を行った集落は特定できていない。

一方で、須玖尾花町遺跡では狭い面積ながらも、微丘陵上の住居跡と丘陵下の水田跡とが調査されている。ただこちらも残念なことに、あまりに調査面積が狭く、集落の様相、水田跡の詳しい状況までは知りえない。

注目すべきは上唐原大法寺遺跡である。弥生時代後期の集落、墓地、水田跡が調査され、集落と墓地は山岡川が形成した自然堤防上に、水田跡は谷状湿地に営まれていたことが分かっている。上唐原大法寺遺跡の集落は、上唐原遺跡、上唐原田法寺遺跡の遺構と同一集落を形成すると考えられ、広範囲にわたって当時の土地利用のあり方を知ることができる貴重な事例である。惜しむらくは、調査報告書が刊行されておらず、現時点では詳細を知りえないことである。

このような状況で本遺跡が調査された意義はやはり大きい。水田跡については水利施設など不明な点を残しているが、およそ浮羽地域における当該期の水田の有り様を知ることができた。今回の調査では集落の縁辺部しか確認できなかったが、今後の発掘調査で集落の中心部の状況を確認できるだろう。その成果をもって他の遺跡と比較検討することで、当時の地形と土地利用のあり方や集落変遷と水田経営の関係などが見えてきそうである。

また、浮羽バイパス関係の発掘調査により得られた成果とあわせ検討することで、浮羽郡域の人々の活動にさらに迫ることができよう。

第2表 福岡県内水田跡調査地一覧

遺跡名	所在地	時代	報告書
1 板付遺跡	福岡市博多区	弥生時代早・前期	「板付周辺遺跡調査報告5」1979・「同8」1981・「同10」1984
2 那珂野休遺跡	福岡市博多区	中世	「那珂野休遺跡Ⅳ」1989・「那珂野休遺跡Ⅴ」1998
3 那珂深マサ遺跡	福岡市博多区	近世以前	「那珂深マサ遺跡Ⅰ」1981・「那珂深マサ遺跡Ⅱ」1982
4 那珂久平遺跡	福岡市博多区	古墳時代・中世	「那珂久平遺跡Ⅰ」1986・「那珂久平Ⅱ」1987
5 井相田C遺跡	福岡市博多区	中世	「井相田C遺跡Ⅰ」1987
6 井相田D遺跡	福岡市博多区	弥生時代・平安時代末～中世	「井相田D遺跡」1999
7 比恵遺跡	福岡市博多区	中世以降	「比恵遺跡群(Ⅱ)」1992
8 雀居遺跡	福岡市博多区	平安時代	「雀居遺跡Ⅰ」1993・「雀居遺跡4」1998
9 柏原遺跡	福岡市南区	中世	「柏原遺跡群Ⅲ」1987
10 野多目遺跡	福岡市南区	弥生時代早期	「野多目遺跡群」1987
11 下山門乙女田遺跡	福岡市西区	中世	「下山門乙女田遺跡」1987
12 拾六町平田遺跡	福岡市西区	弥生時代前期・弥生時代後期～古墳時代前期	「拾六町平田遺跡」1992・「拾六町平田遺跡2」1993
13 野方久保遺跡	福岡市西区	古墳時代前期・奈良・平安時代	「野方久保遺跡Ⅱ」1993
14 大坪遺跡	糸島郡二丈町	弥生前期	「大坪遺跡Ⅱ」1995
15 天田遺跡	春日市	弥生時代・奈良時代	「大荒遺跡 天田遺跡」2001
16 須玖尾花町遺跡	春日市	弥生時代後期	「春日市埋蔵文化財年報Ⅰ」1993
17 上平田遺跡	春日市	弥生時代	「上平田遺跡」1999
18 江辻遺跡第6地点	粕屋郡粕屋町	奈良～平安時代	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成12年度—」2002
19 鹿部木下遺跡水田	古賀市	近世	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成13年度—」2003
20 津古籬田遺跡	小郡市	平安時代	「三国の鼻遺跡Ⅳ 津古籬田遺跡」1987・「津古籬田遺跡Ⅱ」1990
21 三沢公家隈遺跡	小郡市	弥生前期～中期	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成11年度—」2001
22 三沢運輸遺跡	小郡市	弥生後期	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成11年度—」2001
23 堺町遺跡	浮羽郡吉井町	近世以前	「堺町・大塚遺跡」1994
24 吉井穀蘇遺跡	浮羽郡吉井町	不明	「吉井大木遺跡・吉井穀蘇遺跡・富永横枕遺跡」1998
25 富永横枕遺跡	浮羽郡吉井町	中世	同上
26 三河小学校校庭遺跡2次調査	八女市	平安～鎌倉時代	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成13年度—」2003
27 上唐原久保畑遺跡	築上郡大平村	弥生後期	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成13年度—」2003
28 上唐原人法寺遺跡	築上郡大平村	弥生後期	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成13年度—」2003
29 下唐原石ヶ町遺跡	築上郡大平村	弥生後期	「福岡県埋蔵文化財発掘調査年報—平成13年度—」2003

圖 版



調查區全景 (空中写真 上が北 合成)



1号壘穴住居跡炭化材出土状況
(南から)



1号壘穴住居跡完掘状況
(南から)



2号壘穴住居跡完掘状況
(西から)



2号竪穴住居跡カマド
(西から)



2号竪穴住居跡カマド
(西から)



2号竪穴住居跡カマド完掘状況
(西から)



4号竪穴住居跡
(西から)



5・7号竪穴住居跡完掘状況
(南から)

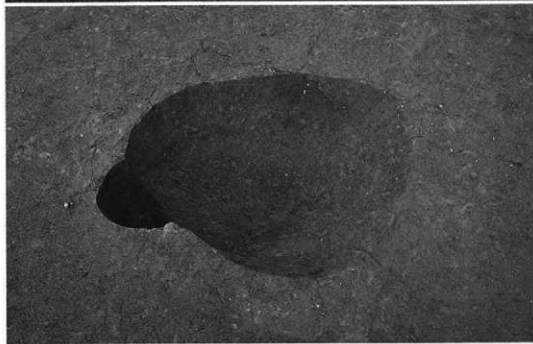


6号竪穴住居跡
(南から)

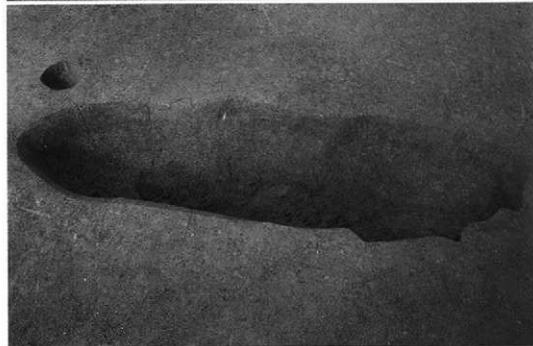
1号土坑土器出土状況
(南から)



1号土坑完掘状況
(南から)

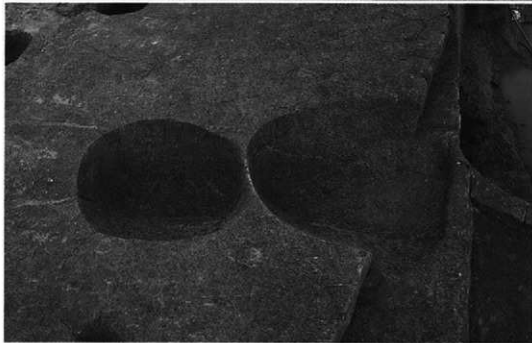


2号土坑完掘状況
(南から)





3・4号土坑土器出土状況
(西から)



3・4号土坑完掘状況
(西から)



5・6号土坑完掘状況
(南から)



7号土坑 (北から)



8号土坑 (北から)



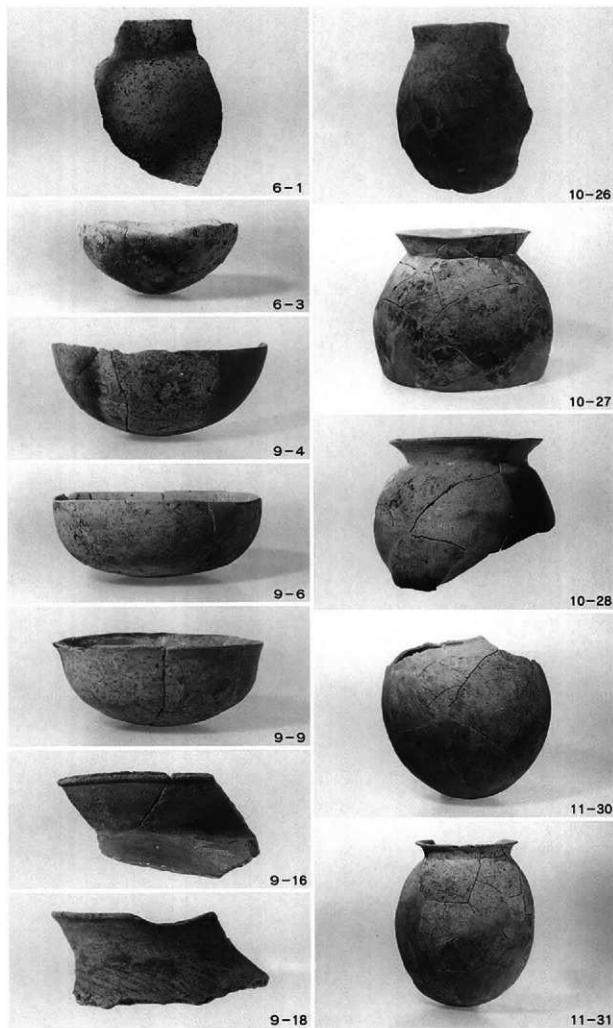
9号土坑 (南から)



竪穴状遺構 (南から)

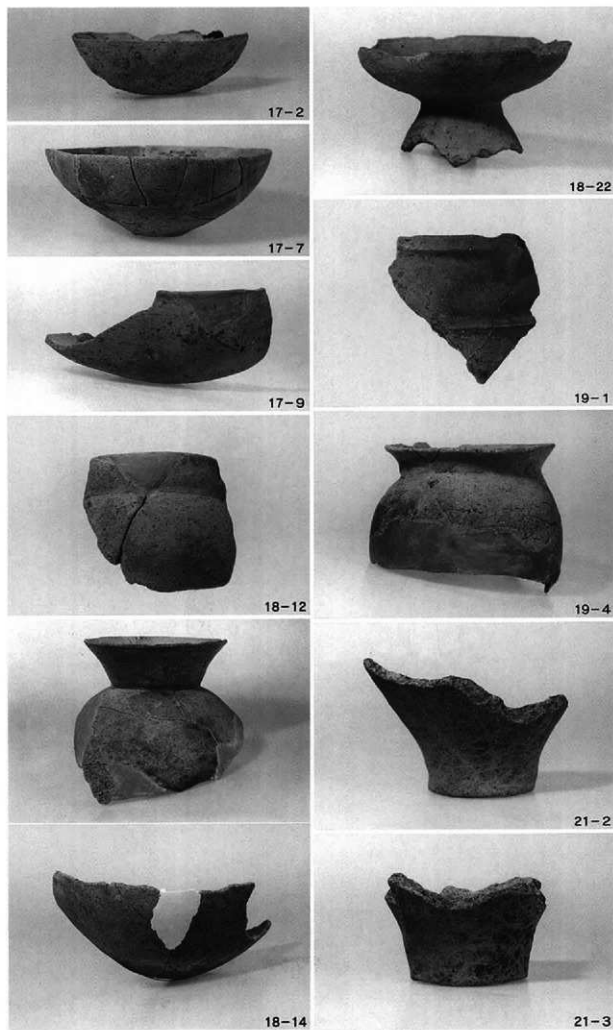


13号溝 (南から)

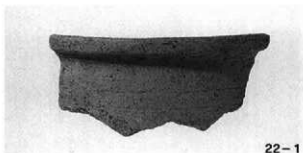


1·2号竖穴住居跡出土土器





6·7号整穴住居跡、1号土坑出土土器





24-1



24-5



24-2



24-7



24-3



24-8



24-4



24-9



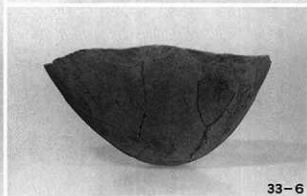
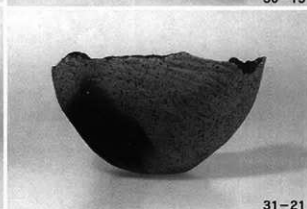
24-6

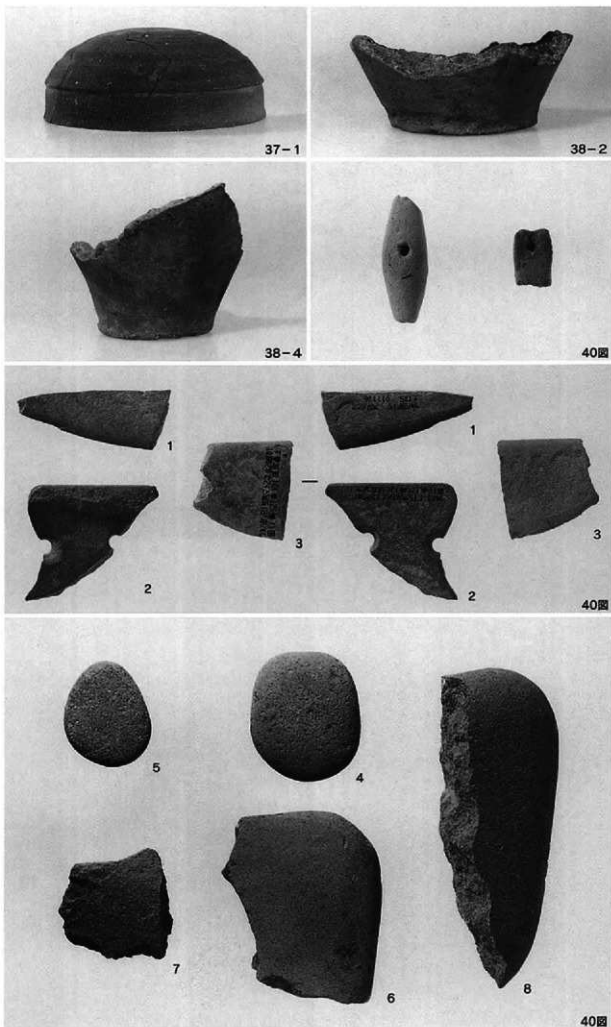


24-10



24-11





水田跡、その他の遺構出土土器、出土土製品、出土石製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおまといせきに							
書 名	大的遺跡Ⅱ							
福 書 名	福岡県浮羽郡田主丸町大字田主丸所在遺跡の調査							
巻 次								
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	21							
編者名	今井 淳子							
編集期間	福岡県教育委員会							
所 在 地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大 的 遺 跡	福岡県浮羽郡 田主丸町大字出主丸	40482	640435	33° 20' 55"	130° 41' 42"	2001.9.10~ 2002.3.8 2002.4.15~ 2002.8.8	3,450	道路建設 (一般国道 210浮羽 バイパス)
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
大 的 遺 跡	集落 水田	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡、 掘立柱建物、 土坑、溝、水田跡	弥生土器、須恵器、 土解歯、土製品、 石製品				

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 15	登録番号 12

一般国道 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第21集
210号

大の遺跡Ⅱ

平成16年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 洲上印刷株式会社福岡支店
福岡市東区多の津1丁目4番3号